
生まれ堕ちるは悪魔の子

生まれ変わった人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれ堕ちるは悪魔の子

【Nコード】

N0277W

【作者名】

生まれ変わった人

【あらすじ】

生まれてくることがなかった新たな命が息吹を上げた……魔法の戦いに物申したのはブローリーの弟！？……『ドラゴンボール』と『魔法少女リリカルなのは』のオリ主クロスオーバーです。

狂気の種

目を開けたら時々思い出す……

『……ついに……ついにできた……』

その声は地から聞こえてくるように暗く、歪んだ歓喜を含ませていた。

『体格も小さく、戦闘意識もオリジナルとは少し遠いが、戦闘力は間違いなく五分五分……』

——これでカカロットとベジータなど……——

男の言葉の意味がよく分からない……それでもこの声が不快だった。

『パラガスさま。既にブロリーさまがおられるのに何故この様な者を生んだのですか？』

『アレはもう制御装置無しでは私の言うことなど聞く訳もない。だからこそ制御の効く、純情な新たな“息子”が必要なのだ』

『では、ブロリーさまは……』

『コントロールできれば兄弟で：三人で宇宙を支配する。もし、万が一のことが起きれば……この惑星は間もなく彗星を衝突させる』

男は部下の科学者と思われる異星人の問いに淡々と答える。

『つまり、そういうことだ』

男：パラガスと名乗る男は部下にそう冷たく、笑いながら言うと部下は冷や汗をかいてパラガスから目を逸らす。

『さあ始まるぞ……』

パラガスは目の前の試験管の前で両手を広げる。

まるで旋律を導く指揮者のように……

『私の時代……私の宇宙が……』

試験管の中の尻尾を生やした赤ん坊に自分の望みを託すのであった……

そして、パラガスの野望も空しく新惑星ベジータと共に碎け散った。

割れた試験管も宇宙のチリとなって……

新たな家族（前書き）

ネットの工事ですばらく更新時間がブレますが、待ってくれたら嬉しいですよ！

新たな家族

ブロリーとの死闘から数日が経ったカプセルコーポレーション

「断る」

「そうかてえこと言うなって、頼むよベジータ」

「お断りだ」

「んなこと言ったらかわいそうじゃねえか」

「くどい!!」

新惑星ベジータでの死闘から地球に辿りついた悟空とベジータは言い争っていた。

その原因は悟空が抱いている赤ん坊のことだった。

「そいつはパラガスのガキだ。どうせロクなものじゃない」

「決めつけるなよ。こんなにちっちゃええなら何もできやしねえって」

それは惑星が爆発する直前にウーロンが水の抜けた試験管の中で泣いていた赤ん坊を拾ってきた。

そして、そのまま宇宙船と一緒に乗ってきた。そしてすぐに悟空に申し出た。

「チチが『ウチにそんな余裕はねえだ!!』っておこんだ。その分ベジータんとこなら金もいっぺえあるから子供の一人や二人なんて簡単だろ?」

「ふざけるな!! こんな得体の知れないガキを家に置いてられるか!!」

「だから大丈夫だって言ってっだろ？　こんな子供ならなんもできねえって」

悟空は依然として赤ん坊をベジータに預けようとして、ベジータも依然として赤ん坊を受け取ろうとはしない。

「預かってもいいじゃねえか！！　オメエとオラの仲じゃねえか！！」

「そんな気色悪い物なんかない！！　もしこいつがサイヤ人ならこいつがオレに向かってくるかもしれん！！　ましてやパラガスのガキだ！！……ならばここで……」

ベジータは手にエネルギーを収束し始めた。それを見た悟空は表情を一変させ、赤ん坊をかばうように構える。

「止めるベジータ……こいつはまだ赤ん坊だ。滅多なこと言うんじやねえ」

「そいつはサイヤ人……少なくともブロリーとなにか繋がりがあるはずだ……」

「なら、オラとオメエで導いてやりゃいい……違うか？」

「戯言は聞き飽きた……そいつを離さなければ貴様もろともぶっ殺すぞ」

「……それがオメエの答えか……」

悟空はベジータの揺るぎない瞳を見つめ、悟空は覚悟を決めた。

こうなった好敵手は話し合いなどで止まるわけがない。

止めたければ己が力を以て黙らせる……それしかなかった」

「ウ……アウ……」

二人の闘気にあてられて赤ん坊がぐずり、涙が溜まっていく。

「わりいが今のオメエにゃあ負けるわけにはいかねえ」

「いいだろう……この際だ……決着をつけるぞ」

周りの地形が二人の気に耐えられずに部屋が悲鳴をあげる。

「オギヤア!! オギヤア!!」

赤ん坊は別の場所に降ろされるが、遂に泣きだしてしまった。

そんな赤ん坊を無視して二人のサイヤ人は間合いを確認して牽制し合う。

静寂が辺りを支配していた。

そして二人が拳を固く握った。

その時だった。

「止めなさいアナタ達!!!!!!」

「ぬお！」

「おわ！」

二人は第三者の怒声で決闘は止まった。

思わぬ大音量に二人は耳を塞いだ。

「子供の前よ!! これ以上やったらタダじゃおかないから!!」

その声の主こそカプセルコーポレーション会長の娘であり、地球で一、二位を争う強い妻・ブルマである。

ブルマは未だに泣いている赤ん坊を抱き上げる。

「おうよしよし、怖いおじちゃんでちゅね」

などと言ってあやしてやる。彼女のいきなりの飛び入り参加に悟空はおろかベジータでさえも目を見開く。

「アウ……ウウ……フエエエ……」

「ねんね……ころりよ……♪」

「……zzz」

段々と泣き止み、ついには泣いて疲れたのかブルマの腕の中で眠りについた。

ブルマは寝たのを確認すると、音を経えない様にゆっくりと、それでいて素早く別の部屋へと運んでやった。

伊達にトランクスの子守りをやっているわけではないと言わんばかりに慣れた手つきを披露した。

しばらくしてブルマは二人の元に戻ってくると、また二人に食いかかるように詰め寄った。

しかもその表情は怒りに満ち満ちていた。

「孫くん!! いくら話を通じないからって子供の前で暴力に持っていけない!! ベジータも物騒なことは言わないの!! 相手はまだ赤ちゃんなのよ!!」

「い」……オラは別に……」

「何も知らんくせに……お前も奴の危険性を理解できんのか!？」

参ったように委縮する悟空に対してベジータは横槍に気分を害したのか腕を組んでブルマを睨む。普通の人ならば失神してしまうほどの威圧を放って……

だが、流石は最強の妻というべきかそんなベジータを相手に引かずに食い下がる。

「あの子がなんであろうとまだ子供なのよ!! ちゃんと面倒みれば問題ないわよ!!」

「奴がサイヤ人としてお前を殺すかもしれんぞ？」

「なら、なおさら放っておくわけにはいかないわ!! あの子は私が面倒みる!!」

「何い!？」

ブルマの仰天発言に流石のベジータも驚愕に目を見開く。

そして、今度はブルマに詰め寄る。

「ふざけるな！！ オレ様はお前を案じてやっているのに何を又か
しやがる！！」

「へー……あんたが私を心配なんて……あんたにそんな良心があっ
たなんて知らなかったわ」

「なんだと！？ それが夫に対する口の聞き方か！！」

「なによ！！ トランクス of 面倒も任せっきりでよくもそんな口が
叩けるわね！！ そんなにいい夫になりたかったらね、少しは育児
に協力なさい！！」

どんどんと加速していく夫婦喧嘩にもはや空気となった悟空もそ
の光景を見つめるしかなかった。幾度も全世界を救った英雄も見る
影が無いほどに……

「もういい！！ 精々殺されるために育てるがいい！！」

「ふん！ そんな子にはさせないわ！ 見てなさい！ 母の力を見
せてやるんだから！」

そんな悟空を置いてけぼりにして喧嘩を続けていたベジータも遂
にブルマの勢いに屈した。

そっぱを向くベジータにブルマは勝ち誇ったように続ける。

「あの子は立派に育てる！！ 決して人に言っても恥ずかしくない
ような子に育ててやるわよ！！」

「サイヤ人にそんな綺麗事は通用せん！！ どれだけ叱ったり矯正
させようと、あのガキの本能には残虐非道なサイヤ人が眠っている
！！」

ベジータが言わんとしているのはこうだ。サイヤ人は血と戦闘を好む生粋の狂戦士であるがゆえに殺しを躊躇しない。それが親であつてもだ。

気に入らない相手であれば親であろうと殺す。

つまり、サイヤ人を育てるには相応の覚悟をしなければならないということだ。

「お前はサイヤ人のことを分かっていない……奴は戦闘と血を好む」
傍から見れば冷徹に答えているようだが、ブルマと悟空には分かつた。

これがベジータなりの優しさなのだ。

今まで傍若無人に振る舞って、殺しに殺した彼だから普通の接し方が分からない。

そんな彼だからこそ、サイヤ人のことを理解し、警告をしているのだ。

そんなベジータにブルマは軽く笑って続けた。

「なら、なんであんたはここにいるのかしら？」

その一言にベジータの肩が一瞬動く。

「あんたが残虐なサイヤ人なのは分かってる……けどこうして平穩

に過ぎ、父親になったじゃない」

「……」

「あの子とあんたが同じだって言うならきつと大丈夫よ」

胸を張って言ったこの言葉に嘘はない。

ベジータと過ごしてきた彼女だからこそ彼の悪いところといい所を理解している。

そんな彼女だからこそ、あの赤ん坊を立派に育てたいと思ったのだ。

彼女の意志の堅さをベジータは察知し……

「……勝手にしろ」

そう言い残してベジータはブルマと顔を合わせることなく部屋を後にした。

その場に残ったブルマに悟空は近付いてお得意の能天気フェイスで言った。

「よかったな」

それに対して素直になりきれないベジータ姿を思い出しながら笑って応える。

「ええ……本当に……」

ブルマの顔はこれ以上はないほど輝いていた。

しばらくして悟空が帰って外が暗くなった時、ブルマは気持ち良さそうに眠っている赤ん坊に笑いかけて頬をつつく。

「……………」

赤ん坊が唸る姿に優しく微笑むブルマ

「あんたの母親になったからには立派に育てるわ」

トランクスのように優しくてかっこいい息子に……

ベジータのように誇り高い息子に育つように……

「私のような美人で天才が母親になったんだから覚悟しなさいよ……」

そんな願いを込めて新たな命に名前を付ける……

「『カリフ』……私のもう一人の息子……」

ありったけの愛情を籠めてもう一人の息子……カリフの頬と別の

息子であるトランスの頬にキスをして一日を終えたのであった。

人生への一歩（前書き）

長らくお待たせしました……最初でこういうのはよくないですよね
……すいませんでした……

人生への一歩

ベジータの一家に新たな家族が増えてから七年が過ぎた。

あれ以来、ブルマの育児量が倍近くまで膨れた。

トランクスに加えてカリフの育児に毎日を追われていた。それでも投げ出すことをしなかったのは流石だと言いか言い様がない。

彼女のあの時の決意が本物だったからこそ為し得た偉業だと言える。

基本的にトランクスとカリフは双子として育てられた。

トランクスはともかく、意外なことにカリフにはサイヤ人特有の狂暴さは見られず、比較的トランクスと同じ感じだった。多分、そこもパラガスの差し金だろう。遺伝子操作さえできればそのくらいどうにでもなる。

そんな二人も乳飲み子から今では立派に育ち、トランクスは天真爛漫なやんちゃ小僧となり、カリフは冷静沈着な性格となつて育つた。

トランクスが“動”ならカリフは“静”と言った感じだ。

正反対な性格な二人だけれど、今ではカリフが兄でトランクスが弟という方程式が成り立った。

もちろん、孫一家とも面識があつて普通に接している。悟飯もカ

リフとトランクスを弟のようにかわいがった。

そこへ孫一家にも新たな命が生まれ、悟天という弟ができた。

それを機に両一家とも親密になったのだった。

そして、カリフを危険視していたベジータはというと、今ではすっかりカリフを息子として見ていた。

最初の四、五年はカリフを警戒していたのだが、ブルマの熱血教育が功を奏した。

時々、問答無用で殴りかかってきたこともあったがベジータの鉄拳制裁教育もあって理性のほうもあらかた問題はない。

カリフ自身もトランクと悟天よりも頭一つ戦闘力も身長も大きく、さらさらの黒髪をなびかせ、年相応のかわいさは無く、凛々しさが目立つ。

「ベジータ、重力制御装置を起動させたいのだが……」

「……ついて来い」

このように、普通に接したりもする。つまり今ではあまり問題ないということだ。

このベジータさまにかかればそれくらい当然だからな。

ただブルマとしては、少し残る残虐なサイヤ人の部分に不服を感じているようだ。

オレとしてはそれくらいがちょうどいいとは思っているし、どっちかといえばオレ様似てそだったことが少し自慢だったりする。

このことをブルマにチクリやがったら遠慮なくブチ撒けるから覚悟しやがれ。

そして、オレはそんな七歳の息子にある話を持ちかける。

「どうした？ ベジータ」
「来たか。座れ」

とても親子とは思えぬ淡泊な会話だが、これがこの家の日常である。

ベジータはカリフをある一室に呼びだして正座させる。

「……」

「……」

両者とも向かい合って何も喋らず、本来なら居心地が悪いところだけど二人にとってはそんな沈黙などなんとも思わない。

そんな感じで向かい合っていたのだが、その長い沈黙もベジータによって破られた。

「宇宙へ旅に出る気はないか？」

「旅？」

ベジータからの意外な提案にカリフの眉が僅かに動く。

「何故そんなことを急に提案するのだ？　今までそんな素振りも話もでてこなかったというのに……」

「今さっき思いついたからだ」

父親の気まぐれにカリフは少し頭を抱える。

少し神経質なカリフにとってベジータや悟空の気まぐれには手を焼いているようだ。

「……オレがブロリーのクローンだからか？　それとも……」

「御託は聞いていない。答えは？」

そんなことはどうでもいいと言わんばかりにベジータは答えを催促すると、カリフは少し考え……

「いいだろう。どうせならすぐに行きたい」

「よし、それなら二日後にお前を飛ばしてやる。それまでに準備しろ」

カリフは至極、いつも通りに返し、ベジータもあっさりと話を切り上げる。

ベジータが部屋を出て、カリフが一人になると一人物思いにふける。

（……ベジータが急にあんな提案をするには何かしらの理由がある……あんなつまらん言い訳などしやがって……なにを考えるか……）

カリフの中でのベジータは父親とは他に闘いのイロハを教えた師、同時に越えるべき相手と考えている。

それ故に、ベジータが気まぐれなものと頑固なのはよく熟知しており、誇り高く、愚かな男では無いとも思っている。

（単にオレを強くしたいのか……もしくはオレを追い出したいのか……）

カリフは基本、打算的な考えで動き、戦を好む。そして無駄だと思ふことには無関心である傾向がある。

どうしようもなく暇なときは鍛錬をしたり、別の娯楽をさがすことがある。

事実、ハンターハンターも数少ない彼の娯楽の一つである。

(……まあいい)

しばらく考えていたが、分からないことをいつまでも引きずりはしない性格のため、ベジータの心の内を推測するのを止めた。

(あっちが何を考えているにせよ、この旅はオレにとって好都合……いや、むしろ僥倖と言うべきか……)

カリフのサイヤ人としての血がうずく。

胸が熱くなり、衝動が段々と強くなり、抑えきれなくなる。

(宇宙なら修業という名目で存分に殺り合える機会も多くなる……母親のうるさい小言も聞かなくて済むと言う訳か……)

銀行強盗や殺人犯やチンピラなどのゴミを一度だけ本気で殺そうとしたこともあったが、その時は悟空に止められ、母親の不本意な説教を喰らったのを覚えている……

だが、あの時感じた血の匂い……高揚感も未だにオレの胸に刻まれ、記憶されている……

もし、あのまま血を浴びればオレはどうなっていただろう……考えるだけで更に胸が高鳴ってくる……!!

やりたい！

やりたい

戦りたい

闘りたい

殺りたい

○
●
たい!!
!!

○
り
たい!!

（だが……）

母親とベジータには育てられた恩がある故に、奴等との約束を破るわけにもいかん……

あの時、オレは四つの誓約を交わされた。

『無闇に命を奪うな』

『殺す意志がない相手は殺すな』

『殺すにしても理由を聞いてから』

『むかついたら殺せ』

最初の二つが母親で、あとはベジータとの誓約である。

母親は兎も角、ベジータまでもがこんな誓約を交わしたことは素直に驚いた。

理由はベジータは教えてくれず、悟空に聞いてみると……

『本能に任せるだけでなく、ちゃんと己を律する心を持って……ベジータはそう伝えたかったんじゃないかとオラあ思うぞ』

最後のはどうかと思うが……たしかに悟空とベジータの言い分にも一理ある。

本能に任せ、失敗した経験などベジータやブルマからよく聞かされた。

そう思うと、この誓約を守ることにも何かしら得るものがあるのではないか？

そうでなくても、オレは約束を破られるのもウソをつかれるのは我慢ができない。

故に、オレも約束も破らないと内に決めた。

そして、この旅はオレの試練なのかもしれない……ベジータが思いついたことなのだから一筋縄にはいかないだろう……

そんな風に考えながらもオレは高揚していた。

やかましい親元を離れ、退屈な地球からもようやく解放されるのだから……

「くくくく……はっはっはっはっは……」

オレは抑えきれない興奮を抑えられず、誰もいない部屋で一人、言い表せぬ快樂に身を任せるのであった。

旅立ちの日

ベジータ公認の旅が決定してから二日経ち、遂に旅立ちの日を迎えた。

カプセルコーポレーションのロケット打ち上げ台に宇宙船が設置され、宇宙船の前には悟空一家、ベジータ一家がいた。

そんな光景にもカリフはいつものように仏頂面で見送りに来た人達を指差して……

「何故こいつ等がこんなとこに来ているのだ？」

不機嫌そうにベジータに聞くも、ベジータまでもが不機嫌そうに腕を組んで応える。

「知るか」

となれば、こいつ等と呼んだのは母上と我が愚弟のトランクスか……余計なマネを……

そう思いながら鋭い目で二人を睨めつけると、トランクスはブルマの足元に逃げ、ブルマは華麗に無視してほくそ笑む。……納得いかねえ……

「ねえねえ……」

「？」

もう諦めて頭を抱えていた時、我が二人目の愚弟の悟天がオレの

足を引っ張ってきた。その顔はあと一步で泣き崩れる寸前だ。

それと同時にトランクスも悟天と一緒にオレを見上げてきた。

こ奴等も最後の最後まで……

「なんだ？」

「……カリフはいつ帰ってくるの？」

「なに？」

トランクスの一言に呆気にとられる。

帰る？ オレが？ なんのために？

そう思っていると、悟天までもが聞いてきた。

「次に帰ってきてもっともっと強くなったらボクたちとまた試合しようよ……」

やかましいガキにしては珍しく暗く塞ぎこみやがって……調子を狂わせてくれる……

「そんな約束など知らん」

「「え？」」

期待していた言葉とは反対に、聞きたくなかった無機質な言葉だけが帰ってきた。

「このまま帰ってくることはないかもしれないからその約束はしない」「そ、そんな……」

地球にはなんの未練も感慨もないからもしかしたらもう二度と地球に寄ることはないだろう。

思ったことを言ったらトランクスと悟天が涙を溜めてオレを見てきた。

そんなオレに見かねた母親がオレに言ってきた。

「本当はアンタを旅に出すのは私は反対……けど、アンタは家で一番ベジータに似ているから引きとめはしない……だけどね……」

ブルマはもう諦めたかのように言うが、後でベジータを横目で睨む。睨まれたベジータは知らん顔でそっぽを向く。

ここ毎晩、ベジータとブルマの口喧嘩が激しかったことと明らかに関係あるのだが、そんなことどうでもよかった。

気を取り直してブルマはカリフに向き直って、まごうこと無き母親の顔で命令する。

「時々、疲れたら帰って来なさい……その時はウンとご馳走してあげるから」

……不覚にもその言葉にオレは少しだけ胸が軽くなった気がした。

このオレがガラにも無い……これ以上いると複雑になってくる……

「もう行く」

場の雰囲気になえきれなくなって宇宙船に乗り込む。

そんな中でオレに声をかけてくるギャラリ―

「じゃあな！！ 修業頑張れよ！！」

「また悟天とあそんでやってける！」

「帰ったら試合してあげるから帰って来い」

「次に会ったらカリ兄ちゃんより強くなってやるんだ！！」

悟空、チチ、悟飯、悟天のがカリフに暖かい言葉を送る。

「だったらオレ悟天よりも強くなって先に倒してやる！！」

「元気でやんなさいよ」

「次に会ったらミッチリと鍛えてやる。ありがたく思え」

トランクス、ブルマ、ベジータからの激励。

中には聞き捨てならない言葉も混ざってはいるが、あまり気にしないで乗り込む。

荷物を中に放り投げてカリフは宇宙船から顔だけ出して一言言うてやる。

「なんだ？ しおらしく別れの挨拶とは女々しい奴だ」

「黙れ」

ベジータの嫌味にカリフも思わず言い返し、気を取り直す。

「余計なことを言う気はないけど、これだけは言わせてもらおう」

その顔には自信に満ち溢れていた。

「次に会った時は……オレがN.O. 1だ。だから精々足元をすくわれんように精進するがいい」

そう言うとともに宇宙船のハッチを閉じ、宇宙船を起動させる。

辿る道は最強への道、苛烈を極める獣道

だけど、彼は歩みを止めない。

その道こそ彼の信じる道であり、憧れ続けていた道。

皆の声援を受けたカプセルコーポレーションのロゴ入り宇宙船は
ゆっくりと、着実に天へと登り……

光となって

消えていった……

「行ったか……」

ベジータはいつもの仏頂面で天を仰ぎ、宇宙船を見届ける。

「あんたが追い出したのに、なに鑑賞に浸ってるのよ」

「感傷？　くだらん。これで生意気なガキが当分消えてくれると思
って清々していたところだ」

「ふーん……」

ブルマは平然と辛辣なことを言うベジータを細目で睨み……

「じゃあなんで笑ってるのかしら？　口が上がってるわよ」

「なっ！！」

ブルマの一言で顔に手を当てて顔を隠そうとするるベジータ。

そんなベジータを一瞥して一言。

「ウソよ」

その一言にベジータはハツとし、顔を赤くさせて震えながら拳を握る。

「こ……のお……夫をからかうんじゃない！！」

「じゃあ行くわよ。トランクス」

「うん！」

「おい！　無視するな！！」

トランクスと手を繋いでベジータを無視するブルマに怒声を上げて追いかけるベジータ

その後ろ姿を見ていた悟空だけが分かっていた。

カリフはどちらかと言えばベジータに似た。

だからこそ、ベジータは本人の意志を尊重し、涙を吞んで愛息子を送ったのだ。

同じサイヤ人だからこそ分かるベジータなりの愛情を悟空だけが見抜いていた。

誇り高い王が魅せる密やかな優しさがそこにはあった。

「やっぱオメエはすげえよ……ベジータ」

悟空はだれにも聞こえない程の声で静かに呟いた。

「悟空さ！ 早く帰るべー！」

「おお！ 今行く！」

チチに促された悟空は家族の元に走り寄る前にもう一度だけベジータをチラッと見て、そして笑った。

悟空の視線の中に写ったのは……

誰にも気付かれないように天を仰いで優しい笑顔を浮かべる……

ベジータの姿だった……

「本当に……生意気なガキになりやがって……」

ベジータの声は

優しくそよぐ風に乗って

空へと

溶けていった。

時が経った青い惑星……地球。

地球はいたって平和であり、人々の笑い声で溢れていた。

そんな地球のとある山で、一人の人影が崩れた小屋の前で呆然と膝を着いていた。背丈から見て少年と思えた。

「……」

その人物の瞳には生氣は無く、永久の闇のごとく黒に染まっていた。

その人物の手にはいくつもの風化した写真が握られていた。

写真に写っているのは穏やかに笑う老婆と二人の息子と思わしき青年が二人、そして小さく、バンダナを付けた女の子と女の子と良く似ている母親と思わしき女性が……

その他に老婆と楽しそうに肩を組むもう一人の老婆と、その老婆の肩に手を添える人のよさそうな紫の髪の好青年が写っていた。

ここまでなら普通の集合写真である。

「……」

だが、その中の二人の人物の存在に写真を見た少年は衝撃を与えていた。

「……」

その存在は写真の中央に隣り合わせで座っていた。

一方は仏頂面でそっぽを向く男と、もう一方はそんな隣り合う男を見て太陽のような能天気な笑顔を浮かべる男性が……

「……」

見間違ふことのない……

変わらぬ姿で写真に写る

偉大なる師である悟空と……

偉大なる父であるベジータが写真の中にいたのだから……

「……」

少年の瞳は黒に染まっていた。

深い、深い、光の届かない黒に染まっていた……

「……」

少年……カリフは絶望に打ちひしがれた。

「……」

かつてのパオズ山の……悟空の家の跡の前でただひざまづくしか
できないほどに……

家族と友人達との約束通り、カリフは帰ってきた。

200年の時を経て

彼の知る人もいない地球へ

帰ってきたのだった……

絶望への序章

「来るな化け物!!」

とある星、無法者が根城にする惑星があった。

そこには強姦、殺人などの犯罪歴を持つ犯罪者が徒等を組んでいた。

好きな時に好きな物を略奪することがこの星の日課となっていた。

だが今は、そんな星に混沌が訪れていた。

様々な種族の異星人がある一点に銃を乱射していた。

「死ねえええええ化け物おおおおおおお!!」

星の住人達の周りは凄惨たる光景が広がっていた。

体を縦に引き裂かれている者、腸をぶちまけて事切れている者、上半身を引きちぎられて下半身を血に塗らす死体、首を抉られて倒れる者様々だった。

爆煙と血の匂いが充満する建物での攻防線は苛烈を機分けていたかのように思われていた……が

「是非も無し」

「え?」

そんな無機質な声が聞こえた直前、その場で銃を乱射していた住人のほとんどが腹から内臓を、頭から脳しようにまき散らして破裂した。

「ぎゃあああああああ！！」

「いてえ……いてえよお……」

死に至らなかった者も手足が急に『弾き飛ばされた』

「ふははは……少し押しただけで壊れたな」

そんな地獄の中で一人だけ楽しそうな声を上げる。

その正体こそが、犯罪惑星の住人を皆殺しにし、今さっきも高速で九十人近くを絶命させた人物。

「心配するな。一瞬で楽にしてやる」

犯罪者を追い詰めた少年・サイヤ人のカリフは爆煙の中から堂々と現れた。

手に持っていた“誰かの”腕にかぶりつきながら……

「美味」

愉しそうに笑っていた。

「ひいー！！」

仲間と思われる腕を美味しそうに食べる少年に犯罪者は命乞いを

始めた。

「待ってください！！ 金は上げますから命だけは……！」

住人は銃を捨ててカリフに命乞いをする。地面に手を置いて涙を零す。

それを見下ろしていたカリフはというと……

「ほう……貴様はそんな命乞いに耳を貸したことがあるのか？」

カリフは腹の虫を鳴らしながら呟いた。

「永久に眠れ」

「へ？」

その瞬間、カリフは住人の頭を噛み砕いた。

時を遡り、カリフが旅立ってから二年が経った。

彼は惑星という惑星を渡り、修業を続けていた。

目的は一つ、自由に生き、強くなるためだった。

無人の惑星で修業し、星ぐるみで徒党を組む犯罪者を相手に切磋琢磨を続けてきた。

生意気な者は片っ端から殺し、塵に変えてきた。

だが、それでも弱き者と罪なき者には極力手を出してこなかった。

そして、彼は未だにスーパーサイヤ人2で止まっていた。

つまりは伸び悩んでいたと言う訳だ。

「はっ！ はっ！ ふっ！」

宇宙船に設置されている重力制御装置を稼働させてシャドーボクシングを行っている。

設定は50G

仮想の相手は今までに戦ってきた自分の父。

「ちえらあああ！！！」

渾身の拳を振るうが片手で受け止められ、カウンターの拳が返ってくる。

「ちっ！……くそがあ！！！」

舌打ちしながらカウンターを肘でガードし、ラッシュを連打する。

「だだだだだだだだだだ……！！！」

それでも紙一重でかわされ続ける。

だが、それでもカリフのラッシュの嵐は止むことなく執拗に攻め続ける。

（反射能力、基礎体力全てがまだ奴に及ばない……なら！）

カリフは一つに狙いを定めていた。

防御が疎かになっている右わき腹。もちろんカリフ自身も気付いている。

（もっと……もっと自然にさり気なく……）

戦いに長けている者であれば人体急所と隙に本能的に気付く。実力があればあるほどその傾向も顕著に表れる。

相手がこの隙に気付かないわけがない。

（さあ、ここだ！！ 来い！！）

僅かに見える台風の目。だが、至って自然に、まるで攻めに夢中で疎かになっているように見せて……

しばらくラッシュの嵐を相手に叩きつけるが、全て紙一重に避けられる。

そんな膠着状態が続いていた時だった。

（来た！！）

遂に自分の僅かな隙を狙ってフックを放ってきた。

それに合わせ、狙っていたかのように華麗な捌きでラッシュを止めてカウンターに入る。

常人なら筋肉が引きちぎれるほどの激しい攻防を僅か九歳の少年が仮想相手に繰り広げ、高い戦術を以て修業する光景はあまりに異質。

そんな修業も遂に佳境に入った。

カリフのカウンターが相手の顔面に吸い寄せられていく。

[illegible]

思いの丈を叫び、彼はその拳を振り切った。

同時に飛び散る汗がキラキラと光る。

やっ
た

カリフは密かにそう思っていたが、爽快な気分が一瞬で崩されることになった。

「なに!？」

仮想相手はカウンターを顔面スレスレで空いていた片手で難なく受け止めていた。

――呆ける時間があるのか？――

「なんだ……!!」

一瞬だけ聞き慣れていた上から発言が聞こえたと思った瞬間、今度は相手から拳の嵐が叩きつけられた。

「ちっ！！」

咄嗟にガードするが、ここで自分と相手の圧倒的な差に気付かき

れた。

「疾っ!!」

相手の拳が残像として残るほど速い。

自分が一を繰り出せば相手は十の反撃に出るといった感じだ。

しかも重さも相手が何枚も上手。

圧倒的、万事休す。

そう呼ぶに相応しい状況にカリフはというと……

「ふははははははははは……!!　そうだ!!　それでこそオレが認めた男!!　オレの父親であるが所以だっ!!」

敗色濃い戦いに酔いしれ、歓喜した。

己の目指す道はまだまだ遙か彼方に位置する。

だからこそ、自分はまだまだ強くなければならない。

まだまだ強くなれる!!

頭で新たな目標ができたことでガードがほんの少し緩み……

「しまっ!!」

相手の拳がガードをこじ開け

顔面に

打ちこまれた。

「前回より30秒……更新……」

シャドーを終えたカリフは重力制御を普通に戻し、うつ伏せになって休んでいる。

流れ出る汗は止まることを知らず、小さな水溜りを作る。

その他に残るのは荒々しい呼吸音と少しの爽快感だけだった。

「今日はここまで……明日は……」

足が言うことを効かないので寝返りまで壁まで転がると壁に貼り付けられた紙を朗読する。

「明日で地球だから……地球に着くまでに軽いシャドーを50本を5セットでいいか……」

カリフが地球を出てから丁度二年目の日、彼は地球に帰る。

理由は、そろそろ本物のベジータ、悟空、悟飯との組手で自分の実力を知るため。言いたくは無いが、この三人からなにかを得ることができればまた一つ強くなれると考えての帰還。

もう一つの理由は口うるさい母親からの電話。

「めんどくさい」

一度だけそう言って電話切ると、後からひっきりなしに電話のベルを鳴らし続けられた。

「帰ると言うまで止めないわよ!!」

そう言われ、ウンザリしながらも帰ると約束し、イタ電を止めさせた。

不本意とはいえ、約束したのだから帰らねばなくなってしまうが、後でブルマから今の状況を聞いてみると面白いことが分かった。

それは、悟空のスーパーサイヤ人3化、アルティメット悟飯、フュージョンなる技を行使した弟たち、魔神ブウなる新たな強者、そして、レパトリーの増えた飯の数々。

「二年離れただけで、面白いことになっているじゃあないか」

それが事実ならば帰ってくるのも一興。

そう思い、地球への帰還を楽しみにしながらオレは今日の反省を纏める。

「やっぱオレとしたことが、隙を見せて後手に回ったのが原因か……」

さっきまでのシャドーを思い出して反省をまとめていた。

夢と希望に満ちた地球への帰路。

少年は眠りにつこうと寝る準備をしていた。

そして、忘れていたのだ……

無限の宇宙には無限の数の予想外な出来事が起きるのだと……

カリフが寝静まった直後、軌道から外れて猛スピードで向かってきた小惑星に掠った宇宙船がバランスを失い、ある惑星へと墜落していった。

その惑星の名はニーヴィー

星全体が氷で覆われた絶対零度の星である。

「ヘックション!!」

カリフは突然に感じた寒気に目を覚ました。

鼻水をすすり、汗で冷えていた体に更なる冷気が叩きつけられる。

「さむ……」

外を見ようとするが、外は吹雪で白しか見えない。

なんでこんなところにいるのか分からないカリフは早めに離れようと宇宙船の電源を入れる。

電源が付いて明るくなった部屋の中でコクピットをいじくる。

「よし、異常はないな」

そう言って宇宙船の無傷な状態に安堵しながら自動操縦に切り替え、ポイントを地球に合わせる。

「寝不足か……」

設定を終えたカリフは無理矢理起こされ、解消しきっていない眠気に負けて再びベッドに戻る。

ベッドに入ってすぐに眠ると、宇宙船は浮かび、大気圏を抜けて惑星ニーヴィーから地球へと向かった。

だが、カリフは知らなかった。

ついさっきまでこの吹雪の止まない惑星では急激な火山活動が起きて、地表が少し暖まって辺りの氷が溶けていたことに……

そして、カリフは気付かなかった。

時間を記すコクピットの電子時計の年号に……

彼が最近見た年号はエイジ774年

もちろん今の電子時計も変わらずに時を刻んでいた。

エイジ974年と表示させて……

彼を乗せた宇宙船は地球へと向かうのであった……

強い力を得るための等価交換

地球へ帰還したカリフは困惑した。

目の前には一人、髪を逆立てた少年が睨んでいる。

そして、そんな少年は自分の父親であるベジータに酷似していた。

そして、ここはカプセルコーポレーションで間違いない。

「なんだお前は？ 人の家にズカズカと……」

少年が構えを取っているが、カリフにとってそんなことはどうでもよかった。

（こいつ……ベジータの気とは違う……）

なのに、目の前の状況はどういうことだろうか……

（隠し子か？）

一瞬そう思ったが、そんなことをブルマが許すわけもないからその可能性は捨てた。

「くたばれ!!」

今まで無視していたガキがオレに拳を上げてくる。

しかし、今はそれどころではないからガキの拳をスレスレで首だ

け動かして避ける。

「なに!？」

「この程度で驚くんじゃねえ……」

「!？」

「素人が……」

驚愕するガキの首に気を当てて気絶程度で済ませた。

ガキが崩れるのを確認してからとりあえずコーポレーションに入ろうとするが……

「誰だ!？」

なんか警備員っぽい奴に見つかった。

「……別で探るか」

ここではまともに話せそうもないし、こうまで喧嘩をふっかけられると殺したくなりそうだからという理由ですぐさま上空に飛んで場所を移した。

「速く!! 不審人物が……!」

「……どこだよ？」

「あそこに……ってあれ? どこに……!？」

数分経って警備員が集まったのだが、そこには人影一つなかった。

「ぼっちゃん!!」

気絶していたコーポレーションの御曹司だけを残してカリフは街へと降り立ったのだった。

カリフの不安が次第に大きくなっていく。最初は杞憂だと思っていたにも関わらずに不安が現実になったのだと思わざる得ない証言が次々と出てきたのだから。

西、東、南、北の都は未だにカプセルコーポレーションのおかげで快適になってきているということ。今では『五代目』社長が切り盛りしているおかげらしい。

皆が口を揃え、新聞までもが口を揃える。

『今はエイジ974』だと……

「なんだ……これは……」

冗談にしては笑えなくなってきた状況にカリフは困惑を隠せない。

（なにが一体……そうだ!!）

カリフはもう一つ、思い出した場所がある。

悟空の家。

あの未開の地ならなにか情報が隠されているのではないかと思いつき、急いでパオズ山へと武空術で飛んでいった。

程なくしてパオズ山の上空に辿り着いたカリフは更なる異変に気付いた。

（気が……悟空たちの気が感じられない……）

それどころか小さい生き物の気しか感じられない……それが意味するのは一つ。

人っ子一人もない。

「くそっ！」

不可解な出来事の連続に苛立ちながらも悟空の家へと向かった。

そして見つけた。

壁が崩れ、今にも崩れそうに苔も生え、生い茂った雑草に埋もれていた状態で佇んでいた。

明らかに長年ほったらかしにされた状態にも関わらず、カリフは古びた小屋の中に入る。

舞い上がる埃を腕の一振りで生み出した風で吹き飛ばす。

そして、家のなかのボロボロになった棚や机の中をしらみつぶしに調べ、一枚の写真を見つけた。

あまりに埃被ってボロボロな写真を丁寧に磨いて確認する。

そして、カリフの『なにか』が砕けた……

不安が確信に、予想が残酷な現実となってカリフに突き刺さった。

写真に写るベジータと悟空で確信してしまった。

今はエイジ974……

あれから紛れもなく……200年が経った。

そんな事実を確証させる証拠は不十分だったが、直感で感じた。

ここは……地球……

しかし、ここは自分が住んでいた地球ではない……

なにもかもが変わってしまった地球

自分が知っている物など何もない。自分だけが取り残された世界

自分を知る人物はもういない……

「痛っ!!」

突如として起きる頭痛と不快感に外へ出る。

新鮮な空気を吸い、小屋を見ると過去の面影が思い出される。

はしゃぎ回る悪ガキたちとそれを宥める兄、楽しそうに喋り合う
母親たち、飯にかぶりつく父親たち

「が……あ……」

——痛みが取れない……

だが、200年も経てば人の命など消滅する……

「が……はあ……」

——胸が焼ける……

つまり、全員がこの世にはもういない

「あ”……ああ……」

——ドス黒い感情が湧きあがる……

カリフの気が感情と共に昂る。

「あ”あ”あ”……」

それには絶望、悲しみ、後悔などの負の感情が溢れてくる。

だが、彼の感情を圧倒的に支配する感情があった。

“怒り”

「あ”あ”あ”あ”あ”……！」

もはや理性が保てなくなってきた彼は一つの記憶が呼び起こされる。

『じゃあな！！ 修業頑張れよ！！』

『また悟天とあそんでやってけろ！』

『帰ったら試合してあげるから帰って来い』

『次に会ったらカリ兄ちゃんより強くなってやるんだ！！』

それは昔、去り際に交わした約束。

『だったらオレ悟天よりも強くなって先に倒してやる！！』

『元気でやんなさいよ』

『次に会ったらミッチリと鍛えてやる。ありがたく思え』

そして、今は無き過ぎ去りし約束が頭の中で反芻していた。

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”……！！！！！！」

約束と恩だけは果たすことを信条にしたカリフにとって許し難い行為。

約束を守れなかった自分の弱さに対する怒りがこみ上げる。

「があ”あ”あ”あ”あ”……！！！！！！」

人とは思えない絶叫と共に気が高まり、無意識的に髪が金に変わ

り、金色の戦士・スーパーサイヤ人へと変わる。

それと共に活気あるある街が、山が、海が、地球が揺れた。

「……………!!!!!!」

怒りも絶叫も気も高まり、スーパーサイヤ人2へと変わり……

「■■■■……………!!!!!!」

ついには天をも突く咆哮が放たれ

カリフの発する金色の光が

世界へ

覆い被さった。

「……」

怒りに燃え、後に胸に空虚感が支配したカリフは俯いたまま動かない。

彼は強い金のオーラを覆い、眉毛も消え、金髪も足元に届くくらいに異常に長くなっていた。

彼は境地に達し、限界をまた一つ越えた。

選ばれし金色の戦士だけが達しえる究極の境地。

スーパーサイヤ人3

彼が望んでいた強さが手に入った。

彼の大事な者を犠牲にして、手に入れた力がそこにあった……

「……」

生気の消えた金色の戦士は力の余波で起きた風に長髪をなびかせて

その場に力無く、涙も出さずにうなだれるだけだった……

もはや彼の心の内を知ることが神でさえもできないことだ。

死後の世界

遙か銀河の彼方……

その一つの暗い永久の闇を彷徨う惑星に宇宙船が降りていた。

もはや長い航路でボロボロになっていた船にはカプセルコーポレーションのロゴ

その船の傍で座禅を組んで精神統一をする人影

カリフだった。

地球に降り立ち、新たな力を得たカリフは涙も出せず、しばらくは自分の心の在り方が分からなくなった。

だが、そんな時にカリフはすぐに地球から離れた。

なんでもいい、地球から遠い遠い惑星へと向かった。

まるで、地球から逃げるかのように……

彼はもう二度と地球の地に足を踏み入れることはしないだろう……

彼の自信、プライドが砕かれた地球へもう戻らまいと心に決めて

……

少し彼が落ち着きを取り戻し……近くにあった惑星へと降り立ったというわけだ。

（オレは……これからどうするべきだろうか……）

一つの約束も護れず、一つの恩義も返せず……

（今まで一人で自由になることを求めていたはずだ……それなのに……それなのに何故……）

こんなにも……胸が痛いのだ……

自分の感じたこともなければ、自分の知り得ない心の揺らぎに苛立ちが募る。

カリフの心は今、残虐なサイヤ人と親に甘える人の間で揺れていた。

心も体も不安定なカリフなのでそうなることは至極当然と言えるのだが……

そんな心を落ち着けようと精神統一を続け、深呼吸をする。

そして、一つの答えに落ち着いた。

「……くだらん」

これが自分の選んだ道……どんなことが起ころうと過去はリセットされはしない……

宇宙に出た瞬間から生きるか死ぬかの戦いは始まっていたのだ。

「この力も使わなければ宝の持ち腐れだ……ケホ……」

握りしめた拳を見つめ、もう一つの誓いを思い出した。

『強くなりたい』

昔も今もその気持ちだけは変わらないし、嘘じゃない。自信を持つて言える目標なのだから。

そして、皆との最後の約束でもある。

それなら、このまま突き進むのみ。

今までと何ら変わらない。

「オレもまだまだだな……コホ……」

こんな簡単なことに何故気付かなかったのか……カリフは己が未だに未熟だということを自覚して宇宙船に戻る。

宇宙船に戻ったカリフは適当な位置の惑星へポイントを合わせて自動操縦へと切り替える。

（考えればオレにとっても奴等にとっても都合が良かったのかもしれないかったかもな）

——ケホ

（血も繋がっていないオレは元々は根無し草……奴等も本来の運命や天寿を全うできたのだから）

——コホ

（これでまたいつものように好きな物を食い、好きな所へ飛んで、不愉快な奴等を殺す……要はなににも変わってはいないのさ……）

——ゲホ

（何も変わらない……）

——ゴホ

窓から離れ行く惑星を見下ろし、妙な気分を晴らすためにいつものトレーニングを始めようとメニューが張り付いている壁へと歩いていく。

ビ
チ
ャ

—
—
ゲ
ボ

「……は？」

急に喉の奥からこみ上げてきた“何か”が口からスムーズに出てきた。

その“何か”はカリフの口から出てきて不快な音を出して床に飛び散った。

その“何か”が赤い液体だと認識し、それがなんなのか判明するのにそう時間はいらなかった。

「血……」

それは生命を司る液体、生きとし生ける者に不可欠な命の源。

それが何故、オレの口から出てくるのか……

だが、呆然とするカリフを時間は待ってくれない。

「う……ゴホ！ オエ……！！」

ビチャビチャッ

すぐにまた血が吹き出た。

それも口からだけでなく、鼻、目、肛門など体中の穴という穴から吹き出していた。

おびただしい出血で床に紅い水溜りが形成された。

「ゴボー!!」

バシヤッ

ついには意識がぐらつき、血溜まりの上に倒れる。

鉄の匂いが鼻を刺激し、脳にまで達して吐き気を誘発させる。

「が……あ……」

喋ることも困難になってきた。

なんだか暖かくなってきた……

彼は知らなかったのだ……彼が一時的に着陸した星の大気中に漂っていたウイルスの存在を……

ただの核兵器程度の毒ならば耐えられただろうが、そのウイルスは核兵器の五千万倍もの殺傷能力を誇る。

彼の中に侵入したウイルスは彼の体を蝕み、彼を〇〇していた。

(ああ……そうか……)

だが、カリフの心は落ち着いていた。

今、彼を襲う苦痛は常人相手ならばたやすく恐怖させられるというのに……

彼は直感した。

自分の命もここまでだと……

そして、命が消えかかる間際になって自分の運命と未来を悟り、彼は今までにないほど穏やかな気持ちになっていた。

（オレは……もう奴等と共に死んでいたのか……）

思えば、地球に着いた日から全てが狂っていた。

その綻びは大きくなり、世界を、自分の未来をも狂わせた。

そんな世界で過去の異物であるオレが生きられる訳が無い。

ゴミはゴミ箱へ……

要はそういうことだった。

（今度は寒くなって……もうこれまでか……）

もはや、目の機能も失われ、なぜこうなったのかも分からない。

だけど、これもまた人生

悲惨な最期、幸福な最期、短い人生、長い人生を送って死ぬ者さまざまがこの世界に点在していると言われている。

だが、それは人が勝手に決めた価値観であり、今までの軌跡に価値を見出せるのは結局はその人自身が決めることだ。

猛毒で死に近づく彼にそんな美德を持ち込めば『くだらん』の一言で片づけ、こう言うだろう。

『好きなように生きてきた』……と……

その証拠に彼は目を瞑っていた。

(今……そっちに……)

まるで、無邪気に眠る年相応の子供のように……

カリフ……享年九歳

彼は九年の生涯の幕を閉じた。

主人を失くした宇宙船はもはや船ではなく、彼の亡骸を運ぶだけの棺桶として宇宙を飛び回る。

これから

ずっと……

機能が停止し、その役目を終えるまで……

「う……ん……」

何やら優しい空気に触発されたカリフは目を覚ました。

「……」

寝起きなのか、状況が掴め切れていないカリフは頭を抑えて起き上がる。そして彼は周りを見渡す。

「どこだ……」

悠々と広がる空は白、地面には雲が地平線まで広がる奇妙な世界……こんな幻想的な景色はどここの惑星でも見たことが無い。

「……次から次へと……」

だが、カリフにとって景色など腹の足しにもならない。彼は自己分析をしようと起き上がって散策しようとした時だった。

「よう」

「！！」

背後からかけられた声に驚き、構えを取る。

急に気配もなく忍び寄ってきた輩がいれば警戒は一瞬にして最高潮になる。

だが、振り返った視線の先には予想外な人物がいた。

「はは……オメエ強くなったなあ！」

それは見間違ふことのない

「オマケに背も伸びたんじゃねえか？」

父が好敵手と認め、カリフが認める数少ない人物

「ほら、なんとか言えって。カリフ」

孫悟空だった。

世の中捨てたものじゃない

「……もう一度」

「だからな、オメエはあの時200年も氷漬けにされてたんだぞ？」

「なるほど……どうりで……」

「はっはっは……オメエも又けてんなあ！」

「貴様にだけは言われなくなかった……」

現在ではカリフと悟空はあぐらをかいて互いに語り合っていた。

あの後、悟空に驚きながらもカリフは落ち着かされ、話をするこ
とになった。

どうやら悟空は全て神龍を通じて見ていたため、カリフの身に起
きたことを本人に伝えていた。

その他にも今までのことも話した。

魔神ブウ、ベビー、超17号、そして邪悪龍との決戦を全て話
した。

話を聞いていたカリフはなにか壮大な物を感じ、ため息をつくし
かなかった。

同時に自分が眠っている間にベジータたちがまた更に強くなった
のに悔しさを感じていた。

そんな他愛のない話をしばらく続けていた悟空は物思いにふける
カリフに聞いてみた。

「……オメエ、もう一度やりなおしてみねえか？」
「なに？」

悟空からの一言に目を見開く。

「そんなことができるのか？」

「ああ、オメエの頭に輪っかがあるだろ？」

「ん？ ああ……何だこれ」

「それは死者の印だな。オメエは惑星の特別な病気で死んだのはもう言っただろ？」

「なるほど……だが解せんな。死者であるオレが蘇るのか？」

「オメエも聞いたことあんだろ？ ドラゴンボールの話」

「……」

「まあムリねえか。見たことはねえもんな」

カリフが地球にいる間、危機は全く訪れず、ドラゴンボールを使うこともなかったので少し疑って味いる。

「まあ、軽く答えてくれよ。もし生き還れるとしたらどうする？」

「……」

悟空からの問いにカリフはほくそ笑んで一言。

「愚問だな」

「へ？」

「折角、いい話を聞いたのだ。スパークサイヤ人4？ 望む所ではないか」

ついさっきまでの死の間際に思ったことも今や記憶には入ってお

らず、新たな目標に目を輝かせていた。

そんな彼に悟空は呆然とし、すぐにこみ上げてくる笑いを極力堪える。

「なにを笑っておる……」

「わりいわりい、なんかオメエってば、ベジータに似ててよお」

「当然だ。奴に育てられたのだからな」

当たり前かのように応えるのだが、悟空はなんだか懐かしい気分になった。

なんだか、久しぶりにベジータに会えたような感覚だった。

「それじゃあもう一ついいか？ 答えてくれたら生き還らせてやる」

「なんだ？」

そして、もう一つ聞きたいことがあったから聞いてみる。

「オメエ……どうして強くなりてえんだ？」

「なんで……とは？」

「んゝ例えば……誰かを守るためとか……強くなったらなにがしたいかって聞いてんだよ」

意外な切り返しに悟空もチグハグに説明すると、カリフは間を置かずに応える。

「強くなりたいから。それ以外の理由はない」

「いや、オメエ……」

「話はそれだけか？」

「いや、ちょっと待って！ え〜っとじゃあ……」
「……」

悟空が自分になにを言いたいかわ理解できないカリフに苛立ちが募り、舌打ちをする。

しばらく考えて悟空は思い至った。

「そうだ！！ それならオラから宿題だ！」

「……」

「んな嫌な顔すんなって……そうだな……お題は……」

何で強くなりたいのか……その答えを探せ。

悟空の出題内容にカリフは

「……意味が分かん」

頭を捻ることしかできなかった。

「もし、暇ができたらずしだけ考えるだけでいいんだ。頼むよ」

「……善処しよう」

「おう！！ そうしてくれ！！」

この時はとりあえずの感覚で聞いていただけだったが、それで生き還るのなら望む所だと思った。

「じゃあ用意はいいか？」

「できるだけ早くしてほしいがな」

「神龍ーーーーー！！」

悟空が天に向かって声を張り上げると、上空から巨大で神々しい威圧を放つ龍が現れた。

「これが神龍……」

「おーい！ 話聞いてたなら頼む神龍……！」

『容易いことだ……』

この世界に響く声を放つ龍にしばらく見惚れるも、ある一点から光の柱が現れたのに気付いた。

（これが龍の神の力……興味深いな）

「その柱の中に入れば別の世界の地球に行けるぞ」

「別の世界？ どういうことだ？」

「いやあ、なんかオメエ旅が好きそうだったからな」

はっはっはと笑う悟空に釈然としない感じがするが、カリフとしてはその方が好都合だった。

もはや、あの時の地球にはなんの未練もなかった。

自分が住んでいた地球に戻るよりも何か未知なる物が溢れる面白い場所に行く方が何万倍もよかった。

「好都合」

そう言いながら躊躇いもなく光の中へと飛び込んだ。

カリフの頭にはこれからのことしか考えていない。

過去を認めながら未来を受け入れる。

だが、都合の悪い運命はこの手で叩き潰す。

そう胸に誓いながらカリフは悟空の元から旅立って行った……

「いやゝ♪ これから楽しみだ♪」
『悟空よ……お前も意地が悪いな』

カリフを包みこんだ光が消えた直後、悟空は笑い、神龍がカリフに同情する。

「ひでえこと言うなって、あいつは向上心がたけえからすぐに強くなるさ」

『それを見て楽しむのがお前の算段なのだろう？』

「にっしっし……これで退屈も紛れるな！」

『……』

神龍は悟空の暇つぶしの一環で送られたカリフに本当に同情した。

ともあれ、カリフは一度は失った人生をやり直すこととなった。

この先、どんなことが彼を待っているのか……

だれにも知る術は無い……

なんだ？ この屋敷（前書き）

なんかテーマで分かると思います……こんなタイトルはしばらくで収まりますので……

なんだ？ この屋敷

オレはあまりに眩しい光に目を閉じていた。

神龍と言われる龍にオレは送られた……

「ここが別世界……なのか？」

オレは気が付けばどこかの屋敷の中にいた。

見渡せばかなり規模がでかく、まるで迷路のような場所だ。

「どうやら狸に化かされたか……」

これのどこが別世界だと思っていると、別の音が聞こえてきた。

グー……

「……そういえば200年も何も食えなかった」

よく考えてみれば地球に降り立ってから何も食ってなかったな……

「こっちから食い物の匂い……」

もはやこの衝動は抑えられるとは思えない……

オレは導かれるように匂いに導かれるのであった。

「だれかしら？ 相当死にたいようね……」

私はさっきまでロストログアであるジュエルシードの探索に精を出していた。

そんな中、城の警備システムに反応があった。侵入者だ。

フェイトにはジュエルシードの探索を任せてはいるが、正直期待はできない。

あの子はとても鈍感で愚図だから……

だとしたら私が直接行くしかないわね……

「だけどジュエルシードにはまだ触れてさえもないから管理局が出てくる理由にはならない……ただのコソ泥かしら？」

クスクス……

「だとしたらお灸が必要のようねえ？」

かわいそうだけど、ここに来たのが運のツキ……恨むなら自分の運命を恨んで頂戴ね……

私は椅子から立って侵入者が向かった食堂へと向かう。

「このプレシア・テストロッサを怒らせればどうなるか……教育してあげるから待ってなさい……」

「なんと……ここは理想郷か……」

オレは匂いを頼りに一つの部屋に辿り着いた。そこには肉の匂いが充満していたことから食堂と推測できた。

冷蔵庫を覗けば食料の山……気分が昂ぶってきた……

「なんだか弱々しい気が一つ……いや、更に弱い気がもう一つ……二人か……」

気で城の中を探索したのだが、城の大きさの割に住人が少ない。

しかも一方の気がこっちに向かってきている。バレたか……

「狼藉を働いたのは事実か……仕方なし……か」

なんにせよ、あっちから来てくれるのはありがたい。食事を含め、聞きたいことがあったからな……

というわけで……

「姿を見せな」

食堂に辿り着き、侵入者の姿を確認した私は少し拍子抜けした。

なぜなら、そこには少年が一人しかいなかったのだから……

てつきりゴツい男を想像していたのだけど……

しかも、魔力反応は無し。零である。

……ちよつと待って

それならどうしてここに辿り着いたのだ？

いや、それ以前にどうやってここまで侵入を許したのだ？ だ
けど、まるでその場に現れたように侵入されたのも事実……

魔力を持たない人間が丸腰でここまで来るなどありえない。

そもそもここは次元と次元の狭間……あの子は一体……

「姿を見せろ」

「!？」

バレた!？ ちゃんと隠れていたのに!!

なにか探索魔法の類でも使えるの!？

それともレアスキルを……

「二度も言わす気か……出て来い。ブチ殺すぞ」
「くっ!」

完全にバレている……念のためデバイスの殺傷設定をオンにして
おこよう。

未確認相手に警戒しすぎなんてことはないのだから……

「……」

そして私は侵入者に姿を現した。

相手はフェイトと同じくらいの少年……だけどどう見ても一般人でないことは確かだ。

堂々と私を見据える姿に一点のブレがない……

「あなた……名は？」

「……カリフ……お前は何だ？」

「……プレシアよ。プレシア・テストロッサ」

カリフの前に大魔導師で知られるプレシア・テストロッサが悠然と現れる。

プレシアは得体の知れないカリフにデバイスをちらつかせて精神的不安をあおろうとする。

「単刀直入に聞くけど、あなたは何者？」

「それなら飯を食いがてら話そう。そっちのほうも事も円滑に進むんだが」

しかし、デバイスが見えていないのか動揺どころか何の反応も見せずに腕を組んでいる。

そんなカリフに益々警戒を見せるプレシア。というか何で飯？などとも一抹の疑問を抱きながらもこの申し出をチャンスと捉える。

少し話をしてみて思ったが、どうやら話は通じそうである。でなければ名乗るなどと自分の素性を素直に話すわけがない。

それとも、この状況を危機とは思っていないかのどちらか……

いずれにせよ、あっちが話を求めてくるならこちらとしてもありがたい。

あまり魔法を使うわけにもいかないし、万が一にもあの部屋にまで被害が及ばすわけにはいかない……

それなら行動あるのみ

「いいわ……このプレシア・テストロッサ。この城のマスターとしておもてなしさせていただきます」

「ほう、それは楽しみだ」

カリフに一礼して客間へ案内させようと背を向けて食堂を立ち去る。

カリフはその後を追うために冷蔵庫を名残惜しそうに見つめてからプレシアの後について行ったのだった。

使える奴は使っておけ、壊れても知らんがなあ（前書き）

タイトルは今の私のストレスの状態を物語っています……これでや
っと物語……なんですが、これからテスト期間です……もうヤダ……
…更新もできない……

今の僕の心境を表すと

k j b h g f k b ヲ え k r j b f b け w j b ヲ あ s k j v k さ d d
g b k b れ う ご る ぽ d f ぽ づ f b ヲ お じゃ d お

こんな感じです

使える奴は使っておけ、壊れても知らんがなあ

プレシアは困惑し、困惑していた。

カリフと名乗る黒髪の少年を客間に招き入れ、食事を与えた

の、だが……

「モクモク……」

これで何人分だろうか……食料がどんどん少年の口の中に収まり、腹の中で消化されていく。

長方形のテーブルに向かい合うように座って皿を積み上げていくカリフにプレシアも呆然と見ていることしかできなかった。

（はっ！……だめ！ これ以上こいつの好きにしてたら城の食料が！）

正氣に戻ったプレシアは未だに食べ続けるカリフに危機感を覚えながら二、三質問してみる。

「あ、貴方カリフと言ったわね……何者かしら……」
「んぐ？」

急に話を振られたカリフは口に食べ物を詰めたまま食い物の間から見えるプレシアを見据える。

口に詰まっていた物を一気に飲みこみ、カリフは答えた。

「オレは戦闘民族サイヤ人のカリフ。それ以上でもそれ以外の何者でもない」

「……戦闘民族？……サイヤ人？」

プレシアは聞いたことのない単語に訝しげに呟く。

追究しようとするが、また相変わらずに料理を食べるカリフを見て追究を止めた。

今さっき会って分かったのだが、それよりも聞きたいことがあったからこの際置いておいた。

「じゃあまた聞くけど、貴方はどうやってここに来たのかしら？」

「どうやって？」

「ええ、ここは次元の狭間にあるのよ？　なのに魔力の反応もみられない貴方がこの城のセキュリティをくぐり抜けてここに来た……と言う訳」

「ふむ……」

ここでカリフは初めて食事の手を止めた。

正直、自分でも予想外な出来事だったのだから。しかも馬鹿正直に答えても信じてもらえないどころか相手の顰蹙を買うことも有り得る。

ここは事実をボカすくらいにしておこう。

「……なにやら変な光に包まれてな、気付いたらここに来ていた」

嘘は言っていないな……というかこうとしか言いようがない

神龍が死んだオレを生きかえらせて別世界に飛ばしたなんて誰が信じる？

オレだったら迷わずノメしてやるところだ。

「光に包まれて？　　というと貴方は意図的にここに来たわけではないのね？」

「ああ、そうとしか言いようがない」

カリフの言葉にプレシアは考えにふける。

（嘘にしては曖昧な部分はないか……この証言が真実ならこの少年は次元漂流者……管理局にしてもこんな魔力無しの子供一人を送るわけもないか……管理局の線は薄いわね……）

本人の中ではほとんど話の整理を終えていた。

「時空管理局、ロストログア、ミッドチルダ」

「？」

「この三つの中で知ってるものはあるかしら？」

「全く無い」

（質問に対する動揺のブレがない……どうやら彼は嘘を言っている可能性は低そうね……てことはやっぱり……）

プレシアはほとんど真実に辿りついていた。

カリフはなにか納得して頷くプレシアに気付く。

「なんだ？　　人の顔をジロジロと」

「いえ、もしかしてあなたは次元漂流者かと思って……というよりもうそうとしか言いようがないのよね」

「次元漂流者？」

何やら物騒な単語にカリフはモグモグしながら首を傾げる。

そんな彼の反応にプレシアは自分の予想が当たったと直感し、簡単な説明を始める。

「簡単に言えば世界単位での迷子よ。なんらかの原因で起きた次元の歪みに巻き込まれた哀れな人間のことを指すのよ」

「へ〜……すげえな〜……あ、おかわり」

（……このクソガキが……）

遠慮もなくバクバク食べ続け、城の食料が本気で心配になってきたプレシアの嫌みもカリフは完全に無視し、それどころかおかわりなどとのたまうカリフにテーブルの下で握り拳を震わせる。遠慮というのを知らないのか、と。

その食料は正規ルートで手に入れたものじゃないから安くはないというのに……

（それならこいつをここに置いても意味はなさそうね……エサをあげても分かったことといえは次元漂流者だということと、とんでもない大喰らいってだけね）

ため息を吐きながらプレシアはもうカリフを城から追い出そうと、適当な理由をつけようと口を開いた時、カリフの一言がプレシアを黙らせた。

「そう言えば、もう一人のほうはいいなのか？」
「え？」

急に脈絡のない問いにプレシアは気の抜けた声を出す。

「なにを呆ける？」

「な、なになって……ここには私以外に誰も……」

「いるだろうが、位置的にはその壁の向こうに」

「壁……！！？」

プレシアはカリフの指差す方向を見て……驚愕した。

（その壁の向こう……まさかこいつ！！）

「しかも大分弱ってやしないか？　これは……死にかけてんのか？」

「！！！」

カリフの呟きにプレシアは即座に杖を起動させてカリフに向ける。

プレシアの目は血走り、まるで仇敵を見つけたようである。

それに対してカリフは興味がないのか変わらずに飯を頬張る。

そんなカリフの態度が癪に障ったのかさつきとは別人のように高圧的に問いただす。

「あなた、本当に一般人かしら？」

「そう見えるのか？」

尚も、カリフには動揺も見られない。

「じゃあ質問を変えるわ……アリシアのことについて心当たりは？」
「はて？」

「！！ この餓鬼があ！！」

惚けた風に首を傾げるカリフなりの冗談で遂にプレシアの沸点はついに杖を起動させて紫の稲妻をカリフに放った。

一秒とかからない不意打ちにあったカリフは……

「おお」

ノータ임での不意打ちによる驚きと、見たことも無い攻撃方法による感嘆の混ざった声を上げて椅子からジャンプして難なく避ける。

稲妻はカリフの座っていたイスを無残に焼き焦がし、料理を一瞬に燃えカスへと変えた。

プレシアは予想外な動きに驚くが、すぐに立て直す。

「もう食後の運動か？ まあそれも悪くない。あむ」

テーブルから少し離れた地点に着地して回避の際に掴んだ果物を一口でかぶりつく。

「一発を避けたからっていい気にならないで頂戴……恨むならお前のレアスキルを恨むのね……知り過ぎたわね……」

「知り過ぎ？」

「惚けるな！！」

プレシアは杖の先から十はくだらない紫の弾を形成してカリフに全弾撃ち込む。

「速い……けど直線的すぎて芸が無いな」

その場から動かずに首、手や体の各部を捻って全弾全て無駄なくかわす。

「バカめ!!」

「は?……!!」

だが、プレシアがほくそ笑むのと同時にカリフは何かを感じ取って振り返ると、そこにはさっき避けた筈の弾が向かって来ていた。

今度は横に飛んでかわすと、全ての弾はカリフを追いかけるように向かってきた。

「追尾弾か……味な真似を……」

「なら、これもプレゼントするわ!!」

「?……うお!」

冷静に分析していたカリフがプレシアの妙な一言に首を傾げると、急に手足が動かなくなつた。

自分の手足を見ると、そこには紫の輪が巻きついていていた。

「設置型バインドよ。魔力もありったけ注いだから簡単には壊せないわよ?」

「バインド? 魔力?」

「それよりもあれはいいのかしら?」

「ん？」

プレシアの言葉に引っ掛かる単語に首を傾げるも、プレシアの一言に視線を前に戻すと弾が自分の元へ迫ってきていた。

彼女はこれで勝負が決したと思ったのか、杖をリリースモードにした時だった。

「そろそろいいか」

カリフは小さく呟いて、解放した。

「喝っ!!」

目を見開いて気合いを前方へ飛ばすと、突風が生じた。

その突風により弾は全てかき消され、それに飽き足らずテーブルや椅子や皿を全て吹き飛ばした。

「なっ!!」

プレシアが予想外な光景に驚愕し、注意が逸れた時だった。

「ふ」

小さく呼吸と共にカリフの手足の輪を壊し、瞬間移動でプレシアの背後に回り込んで彼女に足払い。バランスを失った彼女のデバイスを払い落とし、片腕で腕を後ろに組ませてもう片方で頭を抑える。

この間、0.5秒

プレシアを組み伏せた瞬間にプレシアの杖がカランと音を立てて床を滑っていく。

そして、組み伏せられたプレシアは何が起きたのか理解できていなかった。

（な、なんでバインドが壊れ……!? いや、それよりも私の魔力弾をかき消した……!! それにさっきまでこいつはあそこに……!!）

突然のことに頭がパニックを起こし、情報処理が追い付いていないのが現状だった。

「詰んだな」

「!!」

そんなプレシアもカリフの一言で気付き……いや、気付かされた。

（殺られる……!!）

そう思ったプレシアは恐怖に目を瞑った。

のだが、

「ふむ、中々楽しかったぞ」

「……へ？」

カリフはあっさりとプレシアを解放し、落とした杖をプレシアに放り投げる

その行動にプレシアは信じられないといった表情で受け取りながら立ち上がる。

「……なぜ殺さなかったの？」

「ん？」

「私はあなたを本気で殺そうとしたのに、なぜあなたは私を生かしたのかしら？」

プレシアは服の埃を払いながら聞いてみる。この少年はさっきまで一方的に正真正銘の殺し合いを無理矢理させたというのに……なぜ殺そうとした相手を許すことができるのか……そう思って聞いてみた。

すると、意外な答えが返ってきた。

「あれが殺し合い？　じゃれ合いの間違いじゃないのか？」

「じゃ、じゃれ合い……」

この子供は……どう生きてきたらそんな考え方ができるのか……
本気でそう思った。

軽い戦慄を覚えていると、更に他の意外な答えが返ってきた。

「それに、患っている死に体をいたぶって喜ぶようなサド気質は持ち合わせていないのではな

「！……貴方まさか！ 私の病気まで……！！」

「お前に流れる気が常人よりも小さいしな、気をコントロールしている様子も無かったからな。毒か病気かのどっちかで迷いはしたがな

「あ、貴方は一体……」

他人には絶対に明かすことはない自分の秘密を次々と初見で見破っていく少年にプレシアは軽い恐怖を抱いた。

しかし、恐怖と一緒に興味も湧いたのは本人だけの秘密である。

そんな感情が頭で反芻する中、カリフは自分を見据えて言った。

「おい」

「え、あ……なにかしら」

威風堂々と体現すべき堂々とした態度でプレシアに視線を向ける。

「なにか、問題事を抱えているのか？」

「そ、そんなことは……」

「血相変えて問答無用で襲ってきたのだ。無いとは言わせんぞ。明らかに一般人のすることではない」

「……」

もはや、この少年の黒瞳に嘘は通じない。

そう悟ったプレシアは話そうとしたが……

「ああ、なにも事の顛末は話さなくて結構だ。要は問題を抱えているかどうかを聞いているだけだからな」

「……理由は聞かないのね」

「理由を聞いてもオレの腹は膨れんからな」

「そう……」

「まあ、でも……」

「？」

カリフは口角を吊り上げる。

「そんな面白そうなこと、放っておくには惜しいからな」

「ちょ、ちょっと待って……それじゃあまるであなたが私に……」

「ああ、少しは手くらしいは貸してやる」

「!!」

もうここまで来ると訳が分からなくなってくる。

なぜ、この少年は今日初めて会った縁も所縁もない自分の手伝いをしようなどと……そう思ったのが見透かされたのかカリフは続けた。

「お前には一飯の礼があるからな、それを返すだけだ」

理由も到底信じられないような物だった。

料理をご馳走しただけで、こうも話が進んでしまうことなど一度も無かった。

「それで、どうする？　オレを信用するのはお前次第……自分で決めろ」

ニタア、と笑う子供にプレシアは先程の恐怖と興味よりも強い感情に包まれた。

希望

ここまで接していればあらかた少年の性格は理解できた。

好戦的で、突発的で我儘で嘘に敏感、されど義理は堅く、理知的な部分も見られる。

そして、戦闘力は軽く見積もってもSランクオーバーをゆうに超える。

そんな人材が自ら強力しようと申し出ている。

そこまで上手い話なら裏があるとも考えられるが、もう時間がない。

（目的を果たすためなら神でも悪魔でも利用してみせる……！！）

自分の命のタイムリミットも考慮した結果、プレシアは口を開いた。

「欲しい物が……あるの」

相対する雷の少女と紅の狼（前書き）

こちらでもテスト関連で遅くなりました!! やっとほんの少し余裕ができたので投稿します!! それではどうぞ!!

相対する雷の少女と紅の狼

「ここか……プレシアの言っていたのは」

現在、カリフは一枚の紙きれを手に巨大なマンションを前に見上げている。

見上げなければ拝めないマンションの上層を見据えてからマンションの中に入っていた。

「3831……3831……っと、ここか」

マンションの上層に辿り着いたカリフは一枚の紙にかいてある数を頼りにドアのナンバーを探し、ある一室の前に立ち止まった。

「ここか」

ドアには『3831』と書かれており、名札もない。

しかも、中から妙な気が感じられる。

そう思いながらカリフはインターホンを押す。

しばらくしてからドアの向こうからパタパタと足音が聞こえてきた。

ドアが開かれると、紅いロングヘアの美女が姿を現した。

「はいはい。どちら様だい？」

「ふむ、ちょっと人探しをしててな……辿ってみたところここに辿り着いたのだが……」

「人探し？　それがウチにいるってのかい？」

「ああ、確か……『アルフ』ってのと『フェイト・テストロッサ』とか言う奴だ」

「!!」

カリフが女性を見上げながらそう言うと、女性の雰囲気が一変した。先程までの子供への対応ではなく、明らかな警戒心と敵意が見られる。

そして、カリフの首に爪を立てた。

「アンタ……“そっち”の住人かい？」

有無を言わさないように、小さく耳元で囁く言葉にカリフはほくそ笑んだ。

ここだ……と。

「なんの目的でここに来た？　まさか管理局……」

「勘違いするな。オレは魔導師でもなければ管理局でもない……魔力反応とやらは感じるのか？」

魔力、デバイス、リンカーコアといったある程度の知識はプレシアから教えられていたため、相手に魔力反応が自分にあるかどうかを探らせると、女性はそれで幾分か落ち着いていた。

「確かに魔力は無いようだねえ……」

「だからそうだと言って……」

ため息を吐きながらここに来た目的を続けようとした時だった。

「アルフ、どうしたの？」

奥から消え入りそうな綺麗な声が聞こえてきた。奥を覗くとツインテールの金髪の少女がこっちに寄ってきた。

「フェイト！！ 来ちゃダメだ！！」

「え、なにを……！！」

フェイトと呼ばれる少女が爪を立てられているカリフを見た瞬間、顔を青ざめ、アルフと呼んだ女性に叫ぶ。

「何してるの！？ 止めてアルフ！！」

「え、でもこいつ……」

「止めて！！」

フェイトはアルフとカリフの間に立ち入ってアルフの手を離させる。

アルフは爪がフェイトに当たると思い、咄嗟に腕を引いて離れた。

「あの、ごめんなさい！！ 普段はこんなことをするような子じゃ

……！！」

「あ、いや、いい……こっちも言葉が足りなかった」

バツと綺麗な髪を振り乱してフェイトはカリフに頭を下げるが、カリフはフェイトの謝罪に少し戸惑いながら返す。

正直言えば、若干興奮してもう少してアルフに襲いかかろうとしたという罪悪感があったことは自分だけの秘密にした。

それよりも、カリフは二人に質問する。

「話を察するに、お前が魔導師のフェイト・テスタロッサ。そつちが狼の使い魔のアルフで間違いないな？」

「！！ どうしてそれを！？」

「フェイト！！」

自分達の正体を知っている同年代のカリフに驚き、離れて警戒しながら構える。それに従うようにアルフも爪と牙を見せて威嚇する。

「（メンド……）たく……プレシアの依頼でお前等を手伝いに来たというのになんだこの仕打ちは」

「え！！……プレシアって……！！」

「なんでお母さんのことも！？」

悪化する状況に愚痴って出した名前に二人は驚愕する。

これは好機だと思い、この際に全て話す。

「簡単に言えば、プレシアはオレにお前等と組んでジュエルシードを探す手伝いをさせに来させたということだ」

「「ええ！？」」

「近所迷惑だ」

二人の予想を遙かに上回る答えがカリフから出た瞬間に絶叫を上げた。それに対してカリフは鬱陶しそうに耳を塞ぐのであった。

二人が落ち着き、カリフは部屋に招かれてテーブルに座って向かい合っている。

「そうかい……鬼婆がそんなことを……」

「さっきから話そうと思ったのにどっかの誰かが聞こうとしなかったのだな。説明が遅れた」

「ぐっ……ていうかアンタも唐突すぎたんだよ!!」

痛い所を突かれたアルフは顔を赤くさせて言い返すアルフは放っている、フェイトが話しかけてくる。

「でも、君には「カリフだ」えっと、カリフには魔力が無いし……それに危ないから……」

「危険など百も承知だ。死ぬ覚悟なんてしてなければこんな所には来やしない」

「でもね……カリフって次元漂流者なんだろう？ 幾らあの鬼婆の命令だからってこんな危険なこと了承したね……」

そう言いながらアルフは魔力もないカリフにこんなことを命令させたプレシアに憤りを感じていた。

（面倒なことは全部フェイトに任せる……て訳かい……）

アルフはカリフがプレシアに脅されていると仮定し、彼に同情した。

だが、当の本人は悲壮感も無く、逆に少し笑っていた。

「そんな話を聞かされたら益々興味が出てきたんだよ。魔法？ 口

ストロギア？　こんな面白そうなこと見逃す方がどうかしてるぜ」
「で、でも……本当に危険なんだよ？」

自信満々に言うカリフにフェイトは説得する。

「なに、やることはやるさ。魔法は使えないが、お前等の負担も少しは軽くはしてやるし、お前等に迷惑はかけん」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、やっぱり巻き込めないよ……」

頑なに拒否するフェイトにカリフは軽く困惑する。

（見た目とは違って強情な奴だ……骨が折れる）

そんな感じで時間が過ぎていくと思われていたのだが……

「アンタ、腕には自信があるのかい？」

「もち、これでも修羅場は潜っている。なんならやってみるか？」

疑うようなアルフにカリフは自信満々に返し、軽くジャブをする。

「そうかい……ならアンタの実力を見せてもらおうじゃないか？」

「アルフ!？」

パートナーの意外な要望にフェイトは驚く。

そんなフェイトにアルフは耳元でカリフに聞こえないように言う。

「アルフ、なんであんなことを……」

「いいんだよ。こうすればあいつも諦めるんじゃないかと思ってね」

「え？　どうということ？」

「だってさ、あいつから魔力反応が全く感じられないでしょ？　だから思い知らせるのさ」

アルフは意地の悪い笑みを浮かべて続ける。

「当然、魔力が無ければ空も飛べないし、アタシ達に敵いっこないって」

「あ。そっか…」

「そういうことだよ」

つまりは、自分達がいかに危険な状況にいるのかを分からせて諦めさせようという算段である。

その真意に気付いたフェイトはすぐにアルフと頷き合い、カリフに向き直る。

「じゃあ、アタシと闘って勝てたらアンタの仲間入りを考えるよ」

「ほう…フェイトはどうするんだ？」

「フェイトは審判だよ」

アルフの言葉にカリフは間を置かずに答えた。

「いいだろう。その話乗った」

「オッケー。場所はここから少し行った河川敷でやるよ」

「望むところだ」

そう言ってカリフと共に部屋を出て、移動中にフェイトはアルフに念話を飛ばす。

（いいの？　アルフだけに任せて）

（いいのいいの。フェイトは疲れてるんだし、それにアイツに怪我なんてさせたくないんでしょ？）

（うん……ごめんね？　こんなことばっかさせて……）

（止めておくれよ。アタシが好きでやってることなんだから）

（ありがとう……カリフには悪いけど、アルフ……）

（大丈夫だよ。魔法を見たらアイツも尻込みするって）

軽い会話を二人だけで繰り返していたのはカリフの知る所ではない。
い。

だが、この二人も知らない。

この目の前で歩く少年の強さの深淵を……

しばらく移動すると、河川敷に着いた。

そこで相対するはアルフとカリフ。

「さーて……やっぱり止めとくかい？」

もう最初から勝っているような口ぶりで笑って降参を誘発させる。

「御託はいい。さっさとかかってきな」

指を動かしてアルフを挑発する。その行動にアルフは少し眉に皺を寄せる。

「へえ……中々威勢のいいガキじゃないかい……それなら……」

アルフは拳を握り……

「後悔すんじゃないよ!!」

カリフに突出してきた。

「おらああああ!!」

アルフは狼の使い魔だと聞いた。

（常人ならざる狼の足の強靱なバネか……一瞬にしてオレとの距離を詰めたか）

数メートルもの間合いを詰めたアルフに感嘆する。

（しかも……一点の迷いもない鋭い攻撃だな……）

振られる拳を眼で追いながらスレスレで避ける。

その間、カリフはアルフの拳と体制を交互に見据えて関心する。

（だが……）

にも関わらず、カリフは手首をゴキゴキと鳴らして……

「速い代わりに軽い」

カリフは首を横に倒すだけで拳をかわすと同時に流れたアルフの背中を押しながら足を払う。

「どわ!!」

拳を振るって前に流れた力と更に背中を押された力が足を払われて支えが無くなったアルフの体は地面に倒れた。

「アルフ!!」

傍目で見っていたフェイトは悲痛な声を上げる。

アルフをしゃがんで見下ろすカリフは薄ら笑いを浮かべて言う。

「どうする？　こんなん止めてオレを味方にするか？　ん？」

その言葉にアルフのこめかみに青筋を浮かべて、立ち上がって拳をカリフに振るった。

「上等じゃないか！！　人が心配してたらつけあがつてく！！
可愛くない奴！！」

そう言いながら飛んで上空からオレンジの魔力弾を数発撃ちこんできた。撃ってきた弾は直立不動のカリフは避けることなく魔力の弾を浴びる。

煙が上がった地点を見下ろしていたアルフはフフンと笑う。

（ア、アルフ……やりすぎじゃないかな……？）

（大丈夫だって、今のは普通の子供が当たっても痛い程度だし、あれくらい私の強い奴にはこれくらいがちょうどいいんだよ）

（うーん……ちょっとかわいそうだけど……仕方ないのかな……）

念話でフェイトは少しカリフに同情してしまうが、これも仕方ないと頭に言い聞かせる。空を飛んで魔力弾を撃つのは魔導師の戦いでは当たり前である。

これで自分の無力さを感じればきつと引き返してくれる。

——自分とは違って彼には輝かしい未来があるのだから

フェイトの一途な優しさ故にこの作戦を実行させたのだが、原点となるその優しさが同じ歳の彼の体とプライドを傷つけるのに抵抗を感じていた。

「アルフ、すぐにカリフを安全な場所に置いて帰ろう」

「あいよ」

そう考えながら気絶したであろうカリフを回収しようとした時だった。

——そうではなくては面白くない

「「!!」」

地の底から聞こえてくるような声に二人の体中から冷えた汗が噴き出した。

「相手に闘志か醜い心がなければ殺りがいない」

「な!?! うわあ!!」

煙の中から途轍もない速度で向かってきたカリフに驚愕しながら彼の大きな蹴りを避けるが、蹴りの風圧で吹き飛ばされる。

その余波は止まることを知らず、河原の地を揺らし、川の水を氾濫させる。

「ぐ……う……!!」

フェイトは吹き荒れる余波に飛ばされないようにと踏ん張る。

「う……こ、このお!!」

相当飛ばされながらも根性で空中で踏ん張ったアルフは先程まで自分のいた彼方を見ると、そこには悠々と腕を組んで空中にたたずむ少年。

【大丈夫!? アルフ!!】

【うん……全然大丈夫だけど……】

マスターからの心配も何気なく返すが、その心理は計り知れなかった。

（なんだいあの蹴りは!! あんなの普通の人間が出来る芸当じゃないよ!!）

先程の蹴りをスレスレで避けたから分かる強い一撃。もし喰らっていたら文字通り首が吹っ飛んでいただろう。彼女の動物の勘が警報を鳴らしていた。

手を抜けば死ぬ……と。

もはや、笑い事では済まなくなった事態からカリフを睨んでいたのだが……

「え?」

何の前触れもなくカリフの姿が文字通り消えた。

突然のことにアルフの頭がパニックを起こしていた時だった。

「よお」

「!？」

突如後ろから聞こえてきた声に振り返ると、そこには先程まで彼方にいたカリフがそこにいた。

「来い。お前達の力を見せてみろ」

「う、うるさあい!!」

アルフはフックを以てカリフを遠ざけようとするが、カリフの神学的反射神経でアッサリト避けられる。

そして、焦ることなく彼女の両手を掴んで動きを抑える。

「さて、ここからどうする？」

「くそ、なんて力だい……」

抵抗しようとしても全く振りほどけない。小さな体のどこからこんな力が出てくるのか分からずにいた時だった。

その時だった……

「撃ち抜け、ファイヤ！」

詠唱と共に幾つかの魔力の弾がカリフに飛んできた。

カリフは反射的に片手で全弾を弾いた。

だが、片手が空いた隙にアルフは渾身の力を振り絞ってカリフから離れた。アルフはすぐにここまで近付いてきたフェイトの傍にま

で飛ぶ。

「大丈夫！？ アルフ！！」

「うん……でもなんでフェイトが……」

「ごめん……アルフが危なそうだったから……」

「フェイト……ありがとう……」

遠目であるが、カリフの強大な力を感じたフェイトがすぐに彼女のデバイスのバルディッシュを起動させてアルフに加勢したというわけだ。

そんな感じで話してる時だった。

「オレを前に随分と余裕じゃないかあ？」

「「！！」」

「さあ、やろうか……」

またしても何の前触れもなく自分達の前に現れたカリフに驚愕し、アルフは蹴りを放つ。

だが、それすらも軽く受け止めて腹に一発だけジャブを入れる。

「がっ！」

「アルフ！！」

一発で気を失い、地面に落下していく相棒に悲痛な声を上げるフェイト。

（あ……今のは強かったのか？）

力加減を間違えたと内心で少し焦ったカリフだったが、直後にバルディッシュを鎌状に変換させたフェイトが鎌を振りかぶってきた。

それを避けて、少し距離を置こうと後ろに離れると間髪いれずにフェイトはさっきの弾を形成してカリフにぶつけようと数発放ってきた。

それを見たカリフは避けた直前の体制から避けるのを止め、両手でガードした。

「う……シビれた……お？」

本気で潰そうとしたフェイトの魔力弾もピリっとした痛みと感じるだけで終わった。

そして、視線を戻すとフェイトの姿が少しづれてその場から消えた。

予想以上の相手の動きに少しテンションが上がるが、すぐに後ろからの殺気を感じ、空気の流れを感じたカリフは二本の指先だけで後ろからの断罪の一撃を受け止められた。

「なっ!!」

魔力刃を素手で、しかも振り向くことなく指先だけで受け止めるカリフに驚愕を隠せなかった。

そして、その僅かな隙が決定的だった。

「少し眠れ」

「え？」

その会話の直後、首から衝撃を感じてフェイトの意識は闇に落ちたのだった。

「ん……うん……」

あれ……私……寝てた？

「いけない……お母さん……」

そっか……今までのことは夢だったんだ……アルフ以外の味方が現れて私たちを助けてくれるなんて都合のいいこと……

「夢……だったんだね……」

夢の中の男の子は同じ歳なのにとっても強くて、不思議な雰囲気だったけど悪そうな人じゃなかったのに……できたら友達に……

「あ……それよりもジュエルシード……」

そんな不毛なことを考えを振り払う……疲れてるのかな……

そう思いながら身を起こそうと閉じていた目を開けながら身をよじっている……

「動くな。運び辛い」

「あ、ごめんなさい………え？」

不意に頭上から聞こえてきた。その落ち着いたような声はさっきまで聞いてた気がする。

そう思いながら目を開けるが、起きたばかりの目に夕焼の紅は眩しすぎた。

「やっと起きたと思ったら寝ぼけてんのか……もうメンドいからこのまま連れてくぞ」

次第に慣れてきた視界は徐々に声の主の輪郭を浮き出していく。

そして、完全に回復した時、フェイトは驚愕した。

「あ……カリ……フ？」

「そうだ」

なんだろう……ため息を吐きながら返してきた……というより、気になることがあった。

「私……なんで……？」

「覚えてないのか？」

不思議そうに私を見下ろしている……あれ？　そういえば私寝てたんだっただ……あれ？　じゃあなんでカリフが私の上に……あれ？　そもそも私たち河川敷で……

混乱しながらも自分の置かれていた状況を少しずつ確認していく。

「えっと……私たち闘ってた……だよな？」

「それでオレが勝ったが、気絶したお前等を運んでいる今に至るわけだ」

「あの、アルフは？」

「ん」

そう短く言うと、背中に未だに気絶しているアルフを見せてくれた。アルフの無事を確認したフェイトはホッと息をついたのだった。

（あれ？）

だが、そこで新たな疑問に繋がる。

（アルフはおぶられてるんだよね？……じゃあ私は……）

どうやって運ばれているのか……そんな当たり前な疑問が今頃出てきた。

自分の置かれている状況を分析しよう。私はさっきまで横になって寝ていたし、カリフの顔を見上げている形から仰向けになっているね。うん。

（あれ……そう言えば背中と膝辺りに何か感触が……）

もうここまでで気付いただろう。彼女は今、寝ていたのだ。

カリフの腕の中で

それも俗に言う『お姫様だっこ』という甘ったるい名前の抱かれ方で

「……………はっ！！ ええええええええええ！！」

「うお！！ なんだろうるせえ！！」

しばらくのフリーズの後に自分の状況を把握して絶叫する。それにダメージを喰らったのは至近距離にいるカリフだった。

「え!?! いや、あの……なんでこんな抱き方……え!?!」

「あ? ああ、背中にはアルフがもういるしな、あとはこうやって運ぶしかあるまい」

「え、でも……その……えーっと……」

「ん? 顔紅いな……さっきの戦闘でか?」

近い近い近いよ!! そんなに顔を近寄らせないで!!

「いや、その! 嫌じゃないよ!! 全然!! だけどうこういうのは慣れてないというか、恥ずかしいっていうか……!!」

「……むしろオレが羞恥心でどうかしそうだ」

カリフは哀愁を漂わせながら愚痴る。背中には寝ぼけて自分の頭をエサと間違えて舐めまくる犬使い魔、腕には全身が黒の衣装とマントを羽織った少女を抱えている。

傍から見れば奇妙な光景としか思えない。

「あの……!! もう降りますから!!」

慌ててフェイトはカリフの腕から逃れようともがくが、それも無駄なのかカリフはフェイトを抱く全然力を緩めない。

「止めとけ。今のお前は脳が揺れてるから立ってもコケるのがオチだ」

「で、でも……」

もはや聞く耳もたないといったカリフにフェイトは諦めようとする。だが、それでもこの状況はなんとかしてほしい。

普段でも昼ドラのようなシーンでも苦手なのに、それを実践させられているのだから困った。

困り過ぎてフェイトの頭から何かが溢れだそうとしていた。

「あの……!! でしたら早めに、人に見つからないように急いでお願いします!!」

もはやオーバーヒート寸前のフェイトはこう言うしかなかった。

早くあのマンションに入ってくれば羞恥心くらいは消えるから……と。

「そうか……ならしっかり掴まってる」

「え？」

少し考え、フェイトの体調を考慮して速めの帰宅を了承したカリフはフェイトに忠告する。

なぜそんなことを言ったのか分からないという表情のフェイトにしっかりと向き直って再度の忠告をする。

「いいから掴まれ。決して手を緩めるな。あと、口も閉じてろ。噛みたくなかったらな」

「……あ、はい……」

注意深い忠告にフェイトは従い、カリフの体に更に肉迫する。

（うわぁ……すごく堅い……それに暖かい……）

カリフの体に密着したフェイトは初めて知った男の感触に感動に近い物を感じていた。そして、そんなことも知らずにカリフはアルフの腕をしっかりと掴んで足に力を入れる。

「加減するから振り落とされるなよ」

「え、何を……」

フェイトが何をするのか不安になって問いただそうとした時……

「きゃぁあ!!」

「なに〜？ もうちょつと静かに……うわぁ!!」

カリフの体は宙を跳んだ。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

突然のミサイルにも通用する加速に二人は絶叫しながら必死にカリフに掴まっていた。

寝起きのアルフに至っては心構えもできなかった故に心的ダメージは計り知れなかった。

カリフのジャンプでコンクリートの地面にヒビが割れ、勢い余ってビルの上三十階くらいの高度にまで跳んでしまった。

こうして、遠見市の上空で二人の女性の悲鳴が響き渡った。

「ふむ……中々いい所じゃあないか？」

この時、カリフは上空から街を見渡してプチ観光してたのはご愛嬌である。

新同盟、悪魔と金色の死神（前書き）

すいません！！ 完全に間違えました！！ この話を途中で入れ忘れていました！！

新同盟、悪魔と金色の死神

「アンタ……本気かい？」

カリフとの闘いから少し時間が経った頃の夜、アルフとフェイトは真剣な表情で一人の少年と向かい合っていた。

「さっきからそう言っているのだが？」

言わずもがなカリフである。彼は二人からの度重なる質問攻めにいかにも機嫌悪そうに腕を組んでいた。

額に浮かぶ血管など取るに足らない問題である。

「でも……」

「さっきからでもとかヘチマとかしつけえ。オレが聞きたいのは“はい”か“イエス”だ」

「うう……」

さっきからずっとこの調子である。カリフの好奇心とフェイトの心配症がたがいにくっついて合っている。

カリフとしてはこのままゴリ押しで意見を押し通すことも可能なのだが、相手が子供（自分よりも）っぽいのでなんだか気が引ける。

でも、そんなことを言ったらいつまで経っても平行線なのも事実。こうなったら多少泣かせてでも論破しようと思っていた時だった。

「フェイト、もういいじゃないか」
「アルフ？」

意外な所から助け舟が来た。

カリフ達の横でドッグフードを貪っていたアルフがカリフを擁護してきたのだ。

意外すぎる助け舟に思わずさっきまで一番ぞんざいに扱っていたことを心の中で一応謝っておいた。

「ここまで引き下がないならこいつの覚悟も本物だ。もう首を横にはふらないよ」

「でも……」

「それにこいつめっちゃ強いじゃん、それに根っからのワルには思えないしね」

アルフの言いたいことは分かる。

ほんの短い間とはいえ見せつけられた圧倒的な力。

魔力も無しに魔道師に匹敵……いや、凌駕する強さを兼ね備えたカリフを仲間に迎えることができれば相当なアドバンテージとなる。

だけど、それでも無関係なカリフを巻き込むような真似はフェイトの優しさが許さなかった。

利と性

どちらを取るか迷っていたフェイトの心を後押しすることとなっ

た。

「……本当に手伝うの？」

「くどい」

短く、だが不敵に笑うカリフにフェイトも決めた。

「……じゃあ一つ約束して」

「ん？」

「怪我しちゃ駄目だから……」

少しズれた言葉にコケるのを堪えるも、いつもの様に振る舞う。

「いいだろう……交渉成立だ」

カリフはフェイトに手を差し伸べて握手を促す。その反応にフェイトは少し驚くが、自分の手を服で拭いてから握手で応じた。

こうして、フェイト・テストロッサとアルフの生活に新たな歯車
が加わったのだった。

『ご苦労様……そっちはどう？』

「ああ、腹減った」

『あなたの状態を聞いた訳じゃないんだけど……』

今や午前0時のマンション屋上。フェイトたちは寝静まり、街のイルミネーションが夜空を照らす中でカリフは携帯電話を片手に話こんでいた。

「しかし、なぜオレがこんなことせねばならんのだ」

『あなたが問題起こさないようによ』

「ふん。なら望み通り“はしゃいで”やろうか？」

『絶対に止めなさい』

相手はプレシア。カリフをフェイトの元へ転送する際にカリフに持たせた物である。

理由はプレシアの言う通りカリフに目立つようなことをさせないための保険である。

早い段階から管理局に目をつけられるのは絶対に避けたいがためである。

こうやって定例報告と称してカリフに歯止めをかけることが目的だった。

「そう疑われるのは心外だな。心配せずともジュエルシード捕獲とオレの気分を基準に行動してやる」

『最後の方に色々と思う所があるのだけれど……まあいいわ。とりあえずは普通に過ごして頂戴』

電話越しでも分かる不安そうな声にも気にせず電話を切る。

風の音と上空に淡く輝く三日月を静かに眺め、これからことに想いを馳せる。

異世界、並行世界、魔法、魔道師、時空管理局、ロストログア

その他にもまだまだ未知なる物は必ずあるに違いない。

それらは果たして自分をどこまで楽しませてくれるだろう……どこまで自分を強くするだろうか……

そんな期待を胸にカリフは自然と笑みが零れたのだった。

相対、悪魔と白い魔道師（前書き）

やっとテストが一段落……したのですが、今度は10月はずっと実習なので、その時までにはストックを作っていきます。

それと、カリフの容姿は黒髪にしたキルアと考えてください

相対、悪魔と白い魔道師

フェイトたちと手を組んでから幾ばくかの日が流れた。

調査を開始したもののジュエルシードを見つけるのは魔道師にしか分からないらしかった。

しかも、カリフには魔力もなにもなく、調査はフェイトに丸投げするしかなかった。

少し話が変わってしまうのだが、元々は野宿で済まそうかと思っていたときにフェイトから一緒に住まないかと誘われていた。

そんないきなりの提案に当然カリフもアルフも驚いた。いくらなんでも知り合ったばかりの不審人物を自宅に招くなどどうかしている。

だけど、流石に屋根付きの家にも愛着があり、正直整った環境で生活はしたかった。

カリフからしたらフェイトの優しさが眩しすぎた。

そこでアルフも賛成しているわけだから断りきれなくなっていく、結局折れてしまった。幾ら欲を前提に行動するカリフにも人間らしい仁義と誰かにたよる羞恥心は持ち合わせていた。

カリフは泊めてもらう代わりに全力でフェイトの安全を保障した。

その際にフェイトは顔を紅潮させたのは謎であったのだが……

兎も角、そんなこんなで今ではすっかりフェイトとアルフとの生活にも慣れていったのだった。

そして、そんな彼にやっと待ち望んでいたことが起こったのだった。

「ジュエルシードが見つかっただど？」

「うん。ここからちよつと距離はあるけど海鳴っていうところでジュエルシードが発動しそうだから」

「それは確かか？」

「そりゃそうだよ！！　フェイトの情報網は本物だよ！！」

ソファアに座ってテレビを見ているカリフの横でアルフがドッグフードを貪りながら自慢げに言う。

「そうか……やつとジュエルシードをこの目で見られるのか……楽しみだ」

「でも、扱いを間違えると危険だから気を付けてね？」

「ふん。恐れるに足りんな」

「そんな自身はどこから来るんだい……」

カリフの自信にアルフはどことなくため息を吐く。

「じゃあお昼になったら出発するけど……いいかな？」

「それはお前が決めるがいい。フェイト」

「うん……じゃあお昼食べたら行こう？」

「分かったよ！！　なに食べようか！？」

「じゃあバーミヤンに行くのでしょうか。久しぶりに中華が食いたい」
「いや、なんでカリフが決めるのさ。ここはビッグボーイでしょう」

が
」

いつもより賑やかな日常にフェイトも少し微笑む。

こうしてフェイト一行の昼は過ぎていった。

「あ、
……あれは……」

「た、多分……あの猫の大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじゃないかと……」

私、高町なのはは極々平凡な小学三年生です……ついこの前までは……

どういふことだか今は魔法少女なんてやっちゃってます……

きっかけはユーノくんの部族が発掘したというジュエルシードを集めています。

そして今日かというと、お友達のアリサちゃんと一緒にすずかちゃんの家に遊びに来ていたのですが、なんとそこでジュエルシールドが発動してしまいました！！

私とユーノくんはすぐにその場へと向かったのですが、そこにはなんとおっきな猫がいたのです。

多分あの猫はすずかちゃん猫なのでしょう。

「と、とにかくあのままじゃあ危険だから早く封印しないと」

「そ、そうだね……あのままだとすずちゃんも困っちゃうだろうし」

それに幸運にもこれまでと違って襲ってくる様子もない。

このままレイジングハートで封印しようとした時だった。

「え!？」

背後から音と共に閃光が頭上を通過して巨大な猫に当たった。

——ニャアアアアア!

閃光を喰らった猫はよろめく。

慌てて閃光が飛んできた場所へ目を向けるとそこには黒を強調した金髪の綺麗な女の子。

そして、鋭い目で羽織っているボロボロのマントを風にたなびかせた男の子がそれぞれ木の枝の上から私を見下ろしていました。

「おい、なんでアルフじゃなくてオレなんだ？」

「え？ 何が？」

「何って……アルフを別のジュエルシード捜索にあたらせてオレはお前とジュエルシード捕獲」

「え？ だめだったの？」

「そういうことじゃなくて、こういうのはあまり信用できる奴を同行させると思うんだが？」

「うん。だからカリフと一緒に……」

「……」

猫を見つける数分前にカリフとフェイトはアルフと別れてジュエルシードを目指していた。

アルフも嬉々としてカリフにフェイトを任せて行ってしまった。

「よくこうもアッサリ人を信用できるな……」

「え？ でもカリフは約束……してくれたから……」

「……お前の安全を絶対に保障するってのか」

「うん……」

フェイトは言っていて恥ずかしいのか頬を朱色にほんのりと染める。それに対してカリフは態度も表情も変えずに続ける。

「こういう時の“絶対”とか“約束” っていうのは嘘つきの常套句だろうが。一番信用しなきゃならねえ言葉だ」

「え……じゃあ護ってくれるって言葉は……」

「いやいや、オレのは本当だ。ウソは嫌いなんぞな」

「そうなの？ ……よかった……」

急に泣きそうになったり機嫌なおしたりと忙しい上に世間知らずな奴だ……

……なんであんなこと軽々しく言ってしまったのか……久しぶりに自分の行いに後悔してしまったのは誰にも言えない。

そんな感じで感傷に浸っていた時だった。

「！……カリフ」

「なんだ？」

「あれ見て」

フェイトが指を指す方向を見ると、そこの風景から段々と色

彩が失われていた。

色を失った灰色の光景はカリフたちの元にまで達した。

「なんだこれ？」

「広域結界……辺りの空間との時間軸をずらす魔法……」
「つまりどういうことだ？」

カリフが尋ねると、フェイトは手の甲の三角の水晶体からバルデ
イッシュを取り出す。

「ここに私と同じ魔道師がいる……」

そして、カリフは持つてきていたマントを羽織り、できるだけ姿を見られないようにした直後に二人の少女は相見えた。

「どうする？　状況から見ると奴等の獲物も同じようだが？」

「何とかしてみる」

「やれそうか？」

「うん。ここは私一人で充分だよ」

そう言ってフェイトは白い奴の方へと飛んでいった。

「魔道師とやらの戦いか……これも一興か」

自分とは違った新たな闘いの形を目にできると疼く好奇心を胸に傍観しようとしたのだが……

「……あのネズミ……気がでない……」

やっぱり体を動かしたかったからネズミの元へと向かった。

「あの子、僕と同じ世界の子か！」

不味い……まさかこんなことになるなんて……

さっきの攻撃からしてあの子は闘い慣れている！

（いくらなのはに才能があっても技術や経験じゃあ歯が立たない！）

明らかに分が悪すぎる。今のなのはは例えるならまだヒナ鳥だ。

そう思いながらなのはを援護しようとした時だった。

「待て、ネズミ」

「!!」

突然、僕の前に一人のマントを羽織った少年が舞い降りた。

「お前……喋るのか？ 珍しい生き物だな」

「き、君は……」

ユーノはカリフの値踏みするように探られる視線を受けながら気丈に返す。

「まどろっこしいのは嫌いだから直接言おう……何故貴様等はジュエルシードを集める？」

「何なんだ君たちは!! どうしてジュエルシードのことを知っているんだ!？」

「……あ”？」

「!!」

ユーノの返答にカリフの表情が歪み、ユーノもその変化に圧される。

「チッ……まあいいか、クソネズミと会話できるとは期待してなかった……それ見てみる。お前のパートナーももう限界だな」

「え!？ なのは!!」

カリフの言葉に視線を戻すとその先にはフェイトと鏑迫り合いするなのはの姿があった。

だが、その時だった……ユーノは背後から悪寒を感じた。

「……………ジュール」

「へ？」

首をギギギと後ろに振り向かせると、そこには口からよだれを垂らすカリフがいた。

「……………お前はどんな味がするんだ？」

「……………は？」

「これだけ流暢に喋れるんだ……………頭のミソもタツプリ詰まっているのだろう？」

カリフはよだれを手で無造作に拭き取り、クラウチングスタイルをとる。

「少し小腹がすいてたんだ……………オレに会ったのが運の尽きだったなあ？」

「え、ちよっ……………待って……………!!」

「……………この世の全ての食材に感謝を籠めて……………」

カリフは足に力を入れ……………

「いただきます」

そう言った瞬間にユーノの元へと足のバネを最大に活かしたロケツトダッシュを決めた。

「うわあああああああ!!」

固まっていたユーノは命の危険を感じ、すぐに魔法陣を形成した。

「ねえ!!　なんでこんな事するの!？」

ユーノが己の全てを賭けて闘っている間、なのはとフェイトも互いに火花を散らせていた。

(なんでこの子……こんなに寂しそうなのか?)

つい先程、間近でフェイトの目を見たなのははそう思った。

その目は紅く、他の人を魅了させるほど綺麗なのに……どこかに憂いを帯びていた。

「答えても……きつと意味がない」

そう呟くと、フェイトとなのはは互いにデバイスを相手に向ける。

「フォトンランサー、ゲットセット」

「ディバインバスター、スタンバイ」

そして、二人が勝負を終わらせようとした時だった。

——にゃ……

「あ……」

フェイトに倒された猫の鳴き声になのはの気が逸れた。

その一瞬が命取りだった……

「……ごめんね」

相手の隙を見逃さず、フェイトは本当に小さな謝罪を口にする
と同時に金の魔力弾をなのはへ放った。

なのははそこでやっとな攻撃に気付き、気付いたと同時にその視界
は金の世界に包まれたのだった。

「なのは!!」

必死にカリフから転移魔法で逃げ回っていたユーノは打ち上げられたなのはを目にした瞬間、自分が追われているのを忘れて彼女の元へと方向を変えた。

「なんだ……もう終わったのか……残念だ」

カリフは意識をユーノ（おやつ）から外し、残念そうにしながらピシユンとその場から消えた。

「ジュエルシード、封印」

そう言って猫から出てきた青い宝石……ジュエルシードをバルデ
イッシュのコアへ収納した。

「どうだ？　ちゃんと止めはさしたか？」

「カリフ……そんなことしないよ……」

「軽い冗談だ。なら、もうここには用はないな？」

「うん。今日はもう終わり」

カリフの冗談に苦笑しながら、共に空へ飛び立とうとすると、カ
リフは背後にいるであろうユーノに振り向き……

「今日は……運が良かったなあ？」

「ぐっ！」

Sっ気溢れる笑みをプレゼントすると、ユーノは体毛が逆立ち、
小さく悲鳴を上げた。

その様子を見届けた後、カリフたちは空の彼方へと飛び去って行
った。

「あのネズミ……次こそは確実に……」

カリフは時間切れとなってユーノを食べそこなったことを空を飛びながら後悔していた。

……
幾ら切り替えが速いと言っても、あのタイミングはないだろうと

「……」

そんな愚痴を続けるカリフの横でフェイトはただ無言だった。

どこか、元気を失くしたかのように。

（ジュエルシードの幾つかはあの子が持っている……）

そう思い、フェイトは悲しみの色をより一層濃くさせる。

「……」

そんなフェイトの様子にカリフも何も言えないままマンションにまで帰っていった。

悪魔の温泉ツアー（前書き）

すいません……なんか投稿する順番がこんがらがってしまいました
！！

その上、新しい話を途中に割り込ませました……すいません。少し
浮かれました……

悪魔の温泉ツアー

白い魔道師と美味しそうなネズミとの戦闘から数日の時が過ぎた。

その間にも修業は怠らずに自分を磨いてきた。

はずなのだが……

「……」

「どうしたんだい？ そんな浮かない顔して」

「いや……どうも不本意過ぎてな……」

今現在、オレとアルフは海鳴の温泉宿に来ている。

この温泉宿の近くでジュエルシードの反応が確認されたからここに来た。

「だが、なんでオレがお前の弟だ？ なんて屈辱だ……」

「どういう意味だい？ それ」

アルフが何やら笑いながら怒気を放つが、それは割とどうでもいい。確かに未成年だから一人では入れないのもまあ、分かる。

「普通はフェイトだろ……」

「仕方ないだろ？ フェイトは更に深い調査をして来られないんだから……」

「……いつかぶっ倒れるぞ……最近は夜もあまり寝てないだろうに」
「今度アンタがフェイトに言っておくれよ」

そう言いながらフロントへと足を運ぼうとした時、オレは気付いた。

「ほう……こんな偶然はあるものなんだな」

「どうしたんだい？」

「この前話した白い奴とネズミがこっちに向かっている」

「なんだって!？」

カリフの一言にアルフは驚きのまま叫ぶ。

「その他にも様々な気がある……速さから言って車に乗っているんだろう……」

「アンタそれ……なんで分かるんだい？」

「この前にも話しただろう？ “気”と言う奴を……」

そう、カリフは以前にアルフとフェイトとの戦いの後に質問攻めにあったのだ。

なぜ、そこまで強いのかと……

そこでカリフは“気”のことを話していたのだ。

「ふうん……本当に便利だねえ……」

「まあそんなことはどうでもいい。どうする？」

「ちょっと待って……フェイトは現状維持だって」

「やっぱ魔法ってのは便利だな……」

そう言いながらオレたちは旅館の中へと入っていった。

「はぁ……疲れがとれる……気が高まる〜♪」

現在、カリフは修業で流した汗を露天風呂で流していた。

「ふむ……隣にはあの白いのとネズミか……」

そう言いながらも全く気にしない様子でしばらくの休息を満喫した。

温泉から出た後は別段、やることもなかったからすぐに土産屋へと直行しておやつを探す。

「温泉まんじゅう、モナカ、よりどりみどりだな……」

早速、なにかおやつを物色して自分の分とフェイトの分、アルフには……なんでもいいか……

そう思いながらプレシアからの活動資金という名のお小遣いをま

さぐっていた時だった。

「あ……」

「ん？」

なにやら聞き覚えのある声が聞こえてきたのでそっちに振り向くと、そこには白い魔道師……高町なのはがこっちを驚いた表情で見ている。

そいつの肩に乗っかっているネズミはこっちを威嚇とも恐怖ともとれる表情で構えていた。

「あ、あの……」

オレに話しかけようとしているところを見ると、完全にオレを知っているな……多分、ネズミの入れ知恵だろうな……

「なのはちゃん？」

「どうしたのよ？」

さらに白い奴の後方からまた新たな奴が二人やって来た。

「すずかちゃん……アリサちゃん……」

白い奴がどもっていると、新しい奴等もオレに気付いた。

「あの……君は？」

「なに？ アンタ、なのはの知り合い？」

金髪の奴の高圧な態度に思わずフリッカーギャブを決めたくなっ

だが、ここで問題は起こさないように努め、この場を収めようと立ち上がる。

「な、なによ……」

「……（オロオロ）」

白い奴とネズミも含めた金髪と紫髪の奴より背は若干高かったから見下ろす形になると相手も怯み始めた。

そして、オレは大人の態度をとる。

「あの……これは一体なんなのですか？」

「「!？」」

オレの極めて“大人”な対応に白い奴とネズミが驚愕するのが目に見えた。

滅多にはこんな態度はとらないのだが、どうもあの金髪にカラマれるとめんどくさそうだから見せたオレのもう一つの顔だ。

「えっと……その子が急に僕をだれかと間違えて話しかけてきたようです」

「え？ そうなの？」

「え、いや……」

金髪からの質問に白い奴がどもるが、これ以上長引くとボロを出しかねん……釘を刺しておくか……

「おや、可愛いモルモットですね。撫でてもいいですか？」

「え、あ、あの……ユーノくんはフェレットで……」

だれもがやりそうな反応をしながらオレはネズミを撫でる直前に手の平に書いておいた文字を見せる。

『騒げば殺す』

「「……」」

「ふふ……いい子ですね。これくらい大人しいと食べられる時でも静かそうですね」

「ハイ、ユーノクンハトツテモカシコイデスカラ……」

白い奴とネズミが固まるのを確認した。やはり“大人”の対応は無敵だな……

「アノ、マチガエテコエカケテスマセンデシタ……コンドカラキヲツケマス……」

「はい」

「あ、ちよつとなのは！」

「待ってよく！」

あくまでも“大人”の対応で白い奴を追い返し、他の傀儡も追いつ返した。

ふ、“大人”だな……

そんな自画自賛を胸の内で感じながらもオレはおやつをレジに通した。

その際、店員がおやつタワーを見上げて呆然としていたのは割とどうでもいい話である。

「あ、カリフにアルフ」

「よ」

「見つかったんだって？ さっすがアタシのご主人様だよ」

日も山の奥へと沈み、辺りを闇が支配する世界でカリフとアルフはフェイトと合流した。

「カリフ、楽しかった？」

「ふむ……いいガス抜きにはなったな」

「そう？ よかった」

「フェイト」

「ん？」

カリフは懷から出したレジ袋を取り出すと、それをフェイトに投げる。

フェイトは慌ててキャッチすると、不思議そうにオレを見てくる。

「見てみる」

フェイトは言われた通りにその中を見てみると、そこにはオニギリと焼きそばパン、そしてペットボトル飲料が入っていた。

「え……これって……」

「お前のことだ、ずっと昼食も食ってないのだろうと思ってな」

「私のために……？」

フェイトが少し驚きながら聞こうとするが、カリフが変わらない態度で返す。

「早く全部食え。やるべきことはそれからだ」

そう言ってカリフはさらに懷からフェイトの倍はあるだろう量のレジ袋を取り出し、中から取り出したお菓子類を食い始める。

「カリフ、アタシにもくれ」

「……」

「なんで無言で漬物石なんて放るのさ!!」

「お前はもう喰っただろ」

「アンタもだろ!」

隣でカリフがアルフとお菓子の争奪戦を始めるのを見て、フェイトは表情を少し穏やかなものにした。

そして、彼のほんの少しの優しさにちょっと味わったことのない感情を抱いた。

こんな感情は生まれて初めてのこと。

だけど、不快ではなく、とても暖かく心地よいものだ。

フェイトはそんな嬉しさを噛みしめながらオニギリを頬張るのだった。

月下の戦い、現れた異変（前書き）

多分、今は実習で死んでいるだろう…早く終わらせて死ぬまで飲みたい…この実習が我が大学生活で最も苦しいときなのだから…誤字脱字や感想は10月が終わってからです。

月下の戦い、現れた異変

フェイトと合流してからしばらくの時間を過ごした後、オレたちはジュエルシールドがあるとされる場所に直行する。

そして、川の中で淡く光る宝石を見つけた。

「ほう……あれがジュエルシールドか」

「そっか。カリフは初めて見るんだっけ？」

オレは少し興味を持って、武空術で浮遊しながら川からジュエルシールドを手取る。

「ちよっ、アンタなにしてんのさ!!」

「危ないよ!」

無造作に手に取ったのが悪かったのかアルフとフェイトから注意を受けた。

「え? なにが?」

「なにしてアンタ……そんな無造作に扱って暴走したら……」

「そういったロストログアは扱いに気を付けないと暴走するんだ」

「ふん……」

そんなに危険とされる程の者か……この小さな石に宿る強大な力に興味があったが、どうやら今回はハズレのようだったな。

そんな力を拝めそうになさそうだ。

そう思っていた時だった。

「カリフ!!」

「？」

フェイトの叫びにオレは何かと思った直後、何かの力の奔流が体を駆け巡ったのを感じた。

急な出来事にガラにもなく驚きながらジュエルシードからの力だと悟った。

手から体中を駆け巡る感覚が襲った。

「カリフう!!」

「すぐに捨てな!!」

「あ、ああ……」

二人の剣幕にジュエルシードを川に捨てた。

すると、ジュエルシードはとてつもない発光を起こした。

「カリフ、大丈夫!？」

「ふむ……ピリってきた」

「そんなことで済むわけじゃないか!! あれだけの魔力があなたの中に入ったんだよ!？」

「……なんか、ムズムズする」

たしかに何かの力が無理に入りこんだのは感じたが、なんてことは無かった。というより少し普段味わったことのない感覚に興味が出てしまった。

「ムズムズって……リンカーコアの無い奴ならすぐに何かしら起くるのに……アンタは本当に人間かい？」

「ねえ、本当に大丈夫？ 痛くない？」

「おまいはお母さんか」

どうやらさっきのはとてつもなくやばい状況だった……のか？

確かににんかテンションが上がってちょっとした興奮状態になりかけてはいるが、なんてことはない。

それどころか凄く爽快な気分だ。

「待て！」

そんな時、不意に声が響いてきた。

声の方向に視線を向けるとそこには白い奴とネズミが臨戦態勢でやって来た。

しまった……気を探るの忘れてたな……

「あゝらあらあら……子供は良い子でって言わなかったかい？」

そう言ってアルフは白々しく続ける。

「それをどうする気だ!! それはとても危険な物なんだぞ!!」

ネズミはフェイトにそう言うと、アルフが遮るように話し出す。

「答える理由が見当たらないね……それに言わなかったかい？
良い子でないとガブっていくよって……」

そう言うのと、アルフの体は変異し、髪の毛は体毛へ、手も人間の
ソレとは程遠いものとなった。

そうか……あれがプレシアの言った使い魔の本当の姿か……

話には聞いてはいたが、オレたちサイヤ人の大猿化もあんな感じ
なのだろうな……

「まあ、なんにしても……だ」

そんなことはどうでもいい……

「お前等……食ってやろうかあ？」

「「!!」」

オレは少しおどかさくらいに威圧したが、思ってた以上に脅えて
しまった。

なんでだ？

「で、でも……これだけは譲れない!!」

「聞きわけのない奴だね!!」

ネズミが気丈に言葉を振り絞るも、アルフは白い奴に襲いかかる。

しかし、ネズミは結界を張り、アルフの攻撃を防いだ上になにや
ら新しい術で消えた。

いや、消えたというよりも別の場所へ移ったようだな。気も別のところで現れた。

そう思っていると、今度はフェイトが白い奴に向けてデバイスを構えた。

……まあ、相手はどう見ても一般人だから別にいいのだが……オレが少し遊ぶと壊れそうでもあるし。

「また見学か……つまらんな」

「ご、ごめん。でも、カリフが手を出すこともないと思ったから」

それもそうなんだが……もう考えるのは止めるか……

「分かった分かった……オレは見てるとするか……」

「うん、すぐ終わらせるから」

とは言っても最近、オレって何もしてねえ……くそ、情けねえ……

フェイトは白い奴と相対すると、白い奴から話を切り出した。

「話し合いでなんとかできないかな……」

「私はジュエルシードを集めないといけない……あなたもジュエルシードが目的ならあなたとは敵同士ってことになる」

「そんなこと、頭から決めないように、話し合いは大事だと思うの！」

なのははフェイトに食い下がるが、フェイトは断固として聞き入れはしない。

「話し合ったって何も変わらない……伝わらない！」

フェイトはバルディッシュを起動させると、一瞬でなのはの後ろをついた。

だが、なのはは空へと飛翔することでフェイトの攻撃を避ける。

「賭けて、それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトからのジュエルシードを賭けた闘いが幕を明けたのだった。

「ほう……意外だな」

また傍観役になってしまったカリフは最初は不満気だったが、フェイトとなのはの戦いに少し感心した。

「この前の戦いより白い奴の動きが変わった……」

もし、今回負けたとしてもまた強くなるのでは？

そういった興味も少なからず出てきたから今回の傍観も中々悪いものではない。

オレは橋の手すりに腰をかけた。

——フニャ

「ん？」

だが、なにか尻に違和感を感じた。何かを踏み潰したようなそんな感じが……

冷静になって意識を集中させると、何故か尻……いや、腰の辺りがムズムズしている。

おかしい……なんかこう……

カリフが自分の体に違和感を感じていた頃、アルフは逃げるユーノを追っていた。

「なぜ使い魔を作れるほどの魔道師がここにいる！？　なんのためにジュエルシードを集めている！？」

「ゴチャゴチャうるさい！！」

アルフはユーノからの尋問に苛立ちを隠さない。

「それに君たちと一緒にいるは何者だ！？　魔力が無い辺り一般人じゃないのか！？」

「答える理由なんかない！！」

魔道師とそれを支える者の戦いはより一層加速していく。

「サンダースマッシャー」

「ディバインバスター」

空中で壮絶な戦いを繰り広げている二人の魔道師の砲撃がぶつかり合う。

二つの閃光はぶつかり合った時、フェイトは相手の火力を感じ取った。

「レイジングハート、お願い!!」

だが、それを裏付けるように桃色の閃光は更に強さを増し、やがてフェイトの攻撃を押し切る。

フェイトは桃色の閃光に飲みこまれた。

「なのは……強い!」

地上のユーノはなのはの才能に驚きながらも勝利を確信した。

だが、アルフは違った。

「だけど、甘いね」

アルフには見えていた。フェイトは直前で上空へと回避していたこと、そして……勝負の結末を。

「……」

「う……」

フェイトは無言でなのは首に魔力で造った鎌状の刃を寸止めで押し付けていた。

なのはは思わず苦しそうに声を洩らすと、レイジングハートはコアからジュエルシードを出した。

「レイジングハート！ なにを……！？」

「きつと、主人想いの優しい子なんだ」

そう言いながらフェイトはジュエルシードを受け取って着地する。

「さっすが私のご主人様だよ♪ じゃあねおチビちゃん」

アルフも人間の姿へと戻る。

「あ、待って！」

去ろうとするフェイトを呼びとめるなのは。

「できればもう私たちの前に現れないで。今度会ったらきつと手加

減できない」

突き放す様に応えるフェイトにもめげずになのはは続ける。

「あの！ あなたの名前は！？」

「フェイト、フェイト・テストロッサ」

「私は……！」

なのはの続きは聞かずにフェイトは飛び去っていく。

「じゃあね〜」

アルフも上機嫌にフェイトの後を追う。

「もう終わったか……」

カリフも手すりから降りて後を追おうとすると……

「ねえ君！」

「？」

突如、なのはに呼び止められ、振り返る。

「君の名前は！？」

「……」

なぜ、名前を聞いてくるのか理解できないカリフは首を傾げるが、名乗っても問題無さそうだったから名乗っておく。

「カリフ……これで満足か？」

「え、えっと……私なのは！ 高町なのは！！」

カリフの無意識の睨みに圧されながらもなのはも自己紹介をする。

「ふん……」

だが、カリフにとってはどうでもよく、用が済んだと思い、フェイトたちの氣を追って飛翔する。

「そんな……なぜ彼も飛べるんだ……」

そんなネズミの呟きも無視して元いたマンションへと直行する。

こうして、オレの短い温泉旅行は終わりを告げた。

はずだった……

「……なぜだ」

マンションに帰ってから一夜を過ごしても治らなかった腰の違和感に意を決して洗面場で裸になって鏡で見てみた。

そこには有り得ない物があつた。

「尻尾は昔に切り取ったはずだったはず……」

カリフの腰から茶色く、細長い尻尾がチョココンと頭を出していた。

まだ、中途半端であり、完全には生えきってはいなかったが、確かにあつた。

サイヤ人たる印がそこに……

「温泉に入った時は無かった……いや、そもそも今までもこんな兆候なんて……」

昔に一度だけカリフは尻尾により大猿化……しそうになった。

だが、カリフは強靱な精神力で理性を保ったことがある。

ベジータでもでき得なかったことをカリフはやってのけ、その後にカリフの体をブルマのツテで研究してもらった。

そして、検査の結果、カリフには悟空ともベジータとも悟飯とも違う場所が見つかった。

本能を司る脳の構造が違っていたのだ。

そして、すぐに原因が分かった。パラガスの独自の改造である。

パラガスはブロリーの本能の強さに手を焼き、苦勞していた。

なら、次に造る駒には本能を若干でも抑えてもらう。そういった概念の元で造られたのがカリフである。

「尻尾はベジータに切り取ってもらった……だが、昨日になってなぜ……」

そこで思い至った……まさか、昨日のジュエルシードを触った時

……

「……今度プレシアに聞く必要があるそうだな……」

カリフはとりあえず、尻尾のことは忘れて今日という日を生きるのであった。

戦う理由（前書き）

なんか……今回の主人公がまともに見える……次回からもっと非常に書けてればいいなあ……

そして、この小説の次回の投稿は31日の予定です！

戦う理由

温泉事件からさらに数日が過ぎた。

部屋が夕焼で紅く染められている中でアルフは何かを頬張っていた。

「うーん、やっぱこっちの世界の食事もあるね〜♪」

アルフの前のテーブルにはドッグフード類が散乱している。

「さつてと、ウチのお姫様はっと……」

ドッグフードを片手に別の部屋へと移動すると、そこはベッドルームだった。

ベッドの上にはバリアジャケットのまま眠っているフェイトの姿があった。ベッド横の卓上には食べ残された食事があった。

「あらら……また食べてない……ダメだよフェイト。ちゃんと食べないと」

アルフは心配そうに言うが、フェイトは努めて普段通りに振る舞う。

「ちよつとだけ食べたよ」

「そりゃそうだけど……」

明らかに減った量があまりに少ない。

「カリフは？」

「また修業に出てる。最近何もできないとかでストレス溜まってたからね〜……」

「ふふ……カリフらしいや」

そう言いながら起き上がると、背中のおびただしい傷跡が目に入り、アルフは悲痛に表情を歪ませる。

「……フェイト……大丈夫かい？」

「うん……これくらいへっちゃらだよ」

「でもさ、カリフの言う通りフェイトは働き過ぎだよ……」

「大丈夫だよ。私強いから……」

フェイトの笑顔にアルフはなんだか切なくなるが、頑張るフェイトを絶対を守るという決意をより一層強固の物にさせるのだった。

『ジュエルシールドの効果？』

「ああ、知っている範囲で構わん」

フェイトとアルフが話している同時刻、カリフとプレシアは電話でやり取りしていた。

『そういったところには不干渉でいくはずよ？　　どういう風の吹きまわし？』

「なに、少し気になったことがあってな。約束と義理は必ず果たす」

そう言うと、電話先から数秒の沈黙があったが、プレシアは少しずつ話す。

『ジュエルシードは本来、使用者の願いを叶える物よ』

「願い？」

『そう。だけど、その結晶体自体のエネルギーが大きすぎるが故に願いを必要以上に叶えてしまう不完全な物』

「ほう……では質問を変えるが、もし、魔力の無い者がそいつの魔力を吸ってしまった場合は何が起こるんだ？」

『そうね……そもそもそんな前例はないけれど、多分、リンカーコアの無い体には馴染めずに勝手に排出、もしくは自然消滅が関の山ね』

「……なるほど……分かった」

どうやら、あの時に感じた未知なる感覚は体内に入った魔力……だが、その魔力も消えたというならば未だに引っ込まないこの尻尾はジュエルシードの願いという可能性もあるのか……

『そうそう……最近の人形の様子はどうか？』

「人形……フェイトか」

『ええ……ジュエルシードは集まっているのかしら？』

フェイトを人形呼ばわりするプレシアにカリフは首を傾げ、プレシアのフェイトに対する評価を思い出した。

「フェイトを人形とは……趣味が良いのだな」

『そんなことはどうでもいいのよ。それで、どうなの？』

「……オレからしたらやりすぎる部分はある。まあ一応集まってるはいる」

正直、カリフにとってフェイトたちの一家事情は眼中にない。

自分は返された恩の分だけ恩を返すだけ。そんなメンドくさいことに首を突っ込んではいられないというのが本音である。

『そう……それなら良いのよ』

「そんなに不安ならお前が直接探せ」『そうしたいのは山々だけど、こっちはこっちでやらなくちゃいけないのよ。絶対に計画は成功させるために』

プレシアの明らかに疲労を我慢している声にカリフは溜息を吐く。

「お前等は正真正銘の親子だな」

この何気ない一言はプレシアの心を揺さぶった。

『……それはどういう意味かしら？』

声のトーンが落ち、明らかに怒りを灯している。だが、そんなのはお構いなしにカリフは続ける。

「？　なぜ怒っている？」

『いいから答えなさい。私とフェイトがなぜ似ているのか……』

カリフはプレシアの怒りが理解できなかったが、とりあえず思っ

たことを言ってみる。

「オレから見てお前等親子は頑固なんだよ」

『……私とフェイトが？』

「ああ、お前等は何かしらの目的のためなら自分のことも厭わないところがよく似ていると思った」

『そう……でも、それだけでは本当の親子とは言えないんじゃない？ 親と子でも似てない者同士もいるのよ？』

「それならお前とフェイトとの関係にも言えることだ。お前達が親子では無いという確証もない」

つまり、親と子は似ることもあるし、似てないこともあり得る。

常識に縛られないカリフの行き着く答えにプレシアは何も言えなくなる。

「つまり、親と子との関係なんてよく分からないってわけだ」

『じゃあもし、姿形は理想の形でも思考や人格が理想のとは程遠い子供ができたとする。その時、あなたはその子の親だと思うことができるのかしら？』

プレシアの突然の質問に少し頭を捻って1秒足らずで答えた。

「知らん」

『え？』

「オレは親になったことはないから知らん」

それも当然か……プレシアはカリフの答えにそう思っていたが……

「だが……」

『?』

「理想に叶わなかった子供が生まれてもそれは問題ではない」

『……どうしてそう思うのかしら?』

珍しくプレシアが不思議そうに聞いてきた。

まるで、その答えが自分と違っていろかのように……

「願望なんてそう叶う物ではない、子供はそいつの虚像とは完全に別人なのだからな」

『別……人』

「そうだ。自分の虚像とその子供がどれだけ似てようが似てまいが、その子供はそいつの虚像ではない、確立した別の存在なのだからな……」

いくら理想を描いても生まれてくる子供はそれにそぐわないかもしれない。

そして、どれだけその子供に理想を押し付けても、その子供の存在は変わらない、虚像とは別の存在である。

つまり、いくら他人のまねをしようともその人にはなれないのと同義である。

『……』

その結果に行き着いたプレシアは何も言えなくなってしまう。

「話は以上だ」

『え、ええ……分かったわ』

カリフは電話を切り、すぐにフェイトの元へと戻っていった。

「フェイトと私が親子……ね……」

一方で、カリフと話していたプレシアはカリフから言われた話を反芻させる。

「……フェイトはフェイト……それ以外の何者でもないし、なれもしない……」

今、プレシアが何を考え、何を思っているのかは誰にも分からない。

「……あなたが生きていたら私と同じこと言うのかしら……」

故に、今のプレシアがこの先どうなっていくのかも分からない。

「ねえ……アリシア……」

なぜなら人というのは脆く……

「それなら私はどうしたらいいの？……何にすがって生きていけばいいのよ……」

簡単に変わってしまうのだから……

「こんな人ごみの中にもあるのだな……ジュエルシードってのは」「うん、それで見つけにくいから今から辺りに魔力流を撃ちこんで強制的に発動させるの」「それなら分かりやすくていい」

実際は結構物騒な計画なのに、カリフは面白そうに促してくるから二人は苦笑する。

「じゃあアタシがやるよ」

「大丈夫？ 広域魔法は凄く疲れるよ？」

「アタシを誰の使い魔だと？ 任せて」

「そう言うならお願い」

「文字通りの忠犬だな」

「うっさい。あと、犬って言うな！」

文句を言いながらも魔法陣を展開させ、辺りに雷が落ちる。

「フェイト……」

「うん、あの子も来てる」

カリフの言わんとしていることが分かっていたかのようにバルデ
イッシュを構えていた。

「あの子は私が……」

「……毎回思うんだが、オレがいる意味はあるのか？」

どうせ、またなのはフェイトが、ユーノはアルフが相手にする
だろうと予測できていたカリフはそう言って溜息を吐く。

それに対してフェイトはクスッと笑って答える。

「何かあってもカリフが後ろにいてくれるから私たちも安心できる
んだよ？」

「ふん」

それでも納得できてなさそうなカリフに笑みが零れるも、なのは
の姿を捉えるとすぐに気持ちを切り替えて構える。

そして、互いにジュエルシードの封印にかかる。

「リリカルマジカル!!」

「ジュエルシード、シリアル14!!」

「封印!」

金と桃色の閃光がジュエルシードを挟み合うように激突し、ジュ
エルシードを抑えた。

そして、辺りは静寂に包まれる。

ジュエルシードは沈黙し、なのははジュエルシードの前に立つ。

「行ってくる」

フェイトはそのままジュエルシードの元へと飛び立って行った。

「フェイトちゃん……」

私は知りたい……フェイトちゃんのことを……

（なんで、そんなに寂しい目をしてるのかを……）

「やった！ 早く確保を……！」

「そうはさせるかい！」

やって来たユーノがなのはを促すが、上空から狼のアルフがなのはに襲いかかる。

ユーノはバリアでアルフの猛攻を防ぐ。

アルフは弾かれるが、体制を保って双眼で二人を捉える。

そして、目の前にフェイトも現れる。

「この間は自己紹介出来なかったけど、私はなのは……高町なのは！
私立聖祥大付属小学校三年生！」

「サイスフォーム」

フェイトはなのはの気持ちをあざ笑うかのようにフェイトはバル
ディッシュを鎌状にさせて斬りかかる。だが、なのはも飛翔するこ
とでそれを避ける。

戦いの勢いは増していく。

「ほう……やはりそうか……」

またも遠目で傍観に撤していたカリフは素直に関心した。

その対称はフェイトではなく、高町なのはだった。

「温泉の時よりも動きが段違いに上がっている。しかも初めてフェ
イトに防御させたか」

前々から思っていたことがカリフの中では確信な物へと変わった。

「高町なのは……奴も戦いの中に生きる人間……か……」

フェイト以外にもあの年であそこまで闘える奴がいたとは……

「本当にこの世界は面白い……今回は感謝するぞ、孫悟空」

この時ばかりは第二の人生を与えてくれた張本人に感謝した。

なのはとフェイトの戦いは次第に激しさを増していく。

互いに火花を散らせ、互いの信念をぶつけ合う。

「フェイトちゃん!!」

「!」

突然のなのはの声にフェイトは目を見開く。

なのはは確かなる決意を以てフェイトに言葉を紡ぐ。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ変わらないって言ってたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないことだってあるよ!」

初めて、フェイトの瞳が揺らいだ。

「ぶつかり合ったり、競い合ったりすることは仕方ないのかもしれないけど……何も分からないままぶつかり合うのは嫌だ!!」

なのはは叫ぶ。目の前の少女のことを知りたいがために。

「私がジュエルシードを集めるのはユーノくんのため、そしてジュエルシードで街の人や大切な人が傷つくのを見たくないから!!」

「……」

「これが……私の理由!!」

なのはは叫んだ。目の前の少女に自分のことを知ってもらいたいがために。

フェイトは揺れた。

目の前の少女の素直な気持ちに触れて……

自分の気持ちも知ってもらいたいと思って……

「私は……」

思いの丈を口にする。

その時だった……

「フェイト!! 答えなくていい!!」
「!!」

アルフの叫びが場を揺るがせた。

「優しい人の達の前でヌクヌクと甘ったれて過ごして来たガキンチ
ヨなんかに何も教えなくていい!!」

その言葉になのはは驚き、フェイトは自分を律する。

「私たちが今やることは……!!」

アルフが言い終わる前にフェイトが動き、後からなのはもフェイトを追う。

二人の向かう先はジュエルシード。先に捕獲した者が勝利となる。

そして、二人がジュエルシードにデバイスを突きつけた。

遠目で一部始終を見ていたカリフは少し驚いた。

突然、別の強い力の波長を感じたからである。

「これは驚いた……この前のは段違いだ」

更なる好奇心を抱いたカリフは傍観を止めてジュエルシードの傍にまで行くためにその場からピシユンと音を立てて姿を消した。

「く……」

「ああ！」

フェイトとなのはのデバイスにヒビが入り、ジュエルシードの光に弾き飛ばされる。

フェイトはなんとか立て直し、なのはは地面に叩きつけられたが、バリアジャケットもあるため大丈夫だろう。

「バルディッシュ……」

ヒビ割れたバルディッシュに謝罪しながら手の甲の甲の三角の宝石にバルディッシュをしまう。

そして、前方に浮遊するジュエルシードに向かい、その手に掴む。

「フェイト！ ダメだ危ない！！」

アルフも傍から見たジュエルシードの危険性に気付くが、それでもフェイトは止まらない。

ジュエルシードは対抗するかのように魔力を爆発させる。

「止まれ……」

座り込み、魔法陣を展開させてジュエルシードを抑えこもうとする。

「止まれ……止まれ……！」

フェイトの手から鮮血が飛び散る。

フェイトの体力も消耗していく。

酷い激痛に耐え、ジュエルシードの眠りの時をただひたすら待っていた。

「さっさと離せこのアホが!!」
「え？」

突然、怒鳴り声が聞こえたと思ったら何かがフェイトの手を無理矢理こじ開けて距離を置く。

何がなんだか分からないといったフェイトだったが、すぐに疑問は氷解した。

なぜなら、自分はカリフに抱えられていたのだから。

「カリフ……なにを……」

フェイトはどうしてそんな行動を取ったのか分からない様子だったが……

「……」

有無を言わせないような表情のカリフにフェイトたちは何も言えなくなってしまった。

「アルフラ!!」

「は、はい!？」

「こいつ退かせろ!! ぜってー動かすんじゃねーぞお!!」
「ワオン!!」

アルフとフェイトは初めて見るカリフの剣幕に呆然となり……

「なのはあ!! ……とか言う奴とネズミい!!」

「「ひゃい!!」」

「……余計なことしたら……分かるか？」

「「イエッサー!!」」

同い年の少年とは思えぬ気迫になぜか敬礼した。

本人の意志を確認した所でカリフは未だに暴走するジュエルシードをまるで獣のような目で射抜く。

「……いつまでも調子に乗ってんじゃねーぞ……」

カリフはジュエルシードの元へと足を進めていく。

「カリフ!! ダメ!!」

「カリフくん!!」

フェイトとなのははカリフを止めようと叫ぶ。

だが、それでもカリフは進む。

「なにやってるんだい!! これ以上進めばタダじゃ済まないよ!!」

「止めるんだ! 君がそれほどの魔力にあてられたら最悪死ぬかもしれない!!」

アルフとユーノも必死にカリフを呼び止める。

だが、本人にはその声が聞こえていなかった。

（この……不良品があ!）

内心ではカリフの怒りは最高潮に達していた。

その理由はフェイトの手の傷。

カリフは自分を住まわせるフェイトを守るという誓約を決めていた。

居候が終われば、その誓約もこっちから切るつもりだが、今は違う。

カリフのルール……仁義

要はフェイトには恩を返すことを自分の中でルールとして決めていた。

そうでないと、何かに屈した気になるから……何かに敗北した気になるから……

だからこそ、相手が打ち切るかしないかぎり約束を放棄することは彼の中の禁忌^{タブー}となっている。

だが、その約束を自分で破ってしまった。今回も大丈夫だという慢心から起こった事故。

当然、彼の怒りはそんな自分とその最たる原因のジュエルシードに向けられた。

とてつもない魔力の奔流を叩きつけられても歩を止めることはない。

「そんな……あんな所を魔力も無い彼が進めるなんて……」

例えるなら激流の滝を泳いで昇るのと同義。

そうとしか例えられない。

それだけ過酷な場所を何の苦も無く歩みを止めないカリフに驚きは尽きない。

そして、カリフはジュエルシードの前に辿り着いた。

「力をふりかざす奴を黙らせるには……」

右手にありったけの気を込めて……

「力で潰す！」

ジュエルシードを握った。

「「「「！」「」」」」

四人はその無謀な行為に衝撃を受ける。

その行為がどれほど危険かはフェイトで実証済みだというのに。

四人はカリフを助けるために構えた。

「そろそろ……」

光と魔力が強まるジュエルシードを握る手に更なる力を込めて……

「黙れ」

気を叩きこんだ。

すると、ジュエルシードの光は急に収まった。

「「「……え？」」「」」

四人の驚愕がシンクロした。

周りの驚きなんて知らないカリフは手を開け、動かなくなったジュエルシードを手で弄ぶ。

そして、一言

「帰るぞ」

それだけ言うと、カリフは一人で跳躍し、夜のビルを駆けて去っていった。

「「……」」

なのはとユーノはさっきまでの超現象に身動きが取れなくなり……

「……あ、待ってカリフ!!」

「ちよっ……待ってよ〜フェイト〜」

我に帰ったフェイトとアルフは慌ててカリフの後を追いかけた。

大きな疑念を抱きながらも今日の夜は明けていく。

染められる思いと想い（前書き）

やっと……やっと実習が終わった……

東京に帰ったら勉強頑張って大学院行くのが夢なんだ……

染められる思いと想い

マンションに帰ったフェイトはすぐにジュエルシードから受けた傷の治療を受けていた。フェイトの手の傷も軽かったのは不幸中の幸いだった。

「……」

「えっと……カリフ……」

「……」

「「……」」

だが、新たな不幸が今まさにフェイトたちに牙を見せていた。

めっさ不機嫌そうなカリフが二人をゴっつい睨んでいるのだった。

二人は自分たちの無茶な行動に怒っているのだと思っているようだが、実際は違った。

（くそ……このオレが約束を破るとは……！）

戦いとは別の鋼鉄のルール、その一つを直接的とはいえ破ってしまった。それはすなわち力が無いという敗北感をカリフに与えていた。

そして、約束という重荷は自分という存在を確立させるものだと考えている。

「あの……カリフ……大丈夫？」

大層不機嫌そうなカリフにフェイトはオズオズと話しかけに来了。

そして、カリフは目を見開いてフェイトの真ん前にまで詰め寄ってきた。

「なにが大丈夫だ！ 手を組む前にオレに怪我するとか言っておきながらなにお前が怪我してんだ！！」

「あう……」

「いくらお前でも分かっただろ！ あの石の力を！！ 己の力量も測れずに向かって行くなど愚の骨頂！ 笑止千万！！」

「うう……」

「お前が怪我したおかげでオレも約束を破ることになった！ オレに恥かかせやがって！！」

「……」

反論の余地も許さないようなカリフの説教にフェイトも徐々に涙目になっていった。

アルフも止めたい気持ちはあったが、カリフの言うことも尤もであり、これで無茶な行動が減るのではと少しの期待から口を出すことはしない。

カリフは一通り言いたいことを言った後は目の前の泣きじゃくるフェイトを見て落ち着きを取り戻していった。

「……まあ、これはお前を抑えられなかったオレの責任でもある……」

「そ、そんなこと……」

「まあ、今回はこれくらいにするが、こういうのはこれっきりにしももらいたいものだ」

「うん……ごめん……」

「分かったならいい……」

カリフも気持ちも落ち着いてきたのかテーブルのイスに腰かけた。

「ただ覚えておけ。お前が怪我するのを良しとはしない奴等がいることだけは……それさえ分かったなら良い……」

「……うん」

フェイトもここで少し微笑み、アルフも笑いながらカリフの近くにまで寄ってくる。

「アンタ〱中々格好いいところあるじゃないか？ お姉さん嬉しいぞ〱？」

「ほう……どうやら八つ裂きにされて食われたようだな……上等だ来いよ」

「カリフ……落ち着いて……」

「なんだい照れてるのかい？ 案外可愛いことあるじゃないか♪」

「……」

「無言で拳鳴らさないで！！ アルフももうそれくらいにして！！
……そうだ！！ これからどこか美味しい物でも食べに行こうよ！！
」

フェイトの必死な話題変えにカリフとアルフも動きを止める。

「ふむ……それならバー〇ーキングに行くか……」

「あ、いいねえ！ あそこが結構好きなんだよ」

そう言って二人は意気揚々と外へと出ていくのを見てフェイトは満面の笑みを浮かべて二人の後を追った。

「そうか……体もあともう少し……か……」

『ええ……本格的にやばくなってきたわ……』

「そうか……それなら早めにペースを上げるしかないな」

フェイトとアルフが寝静まった後、マンションの屋上に上がってプレシアと定時連絡をしていた。

少し肌寒いにも関わらずカリフは無地の白いタンクトップな上に修業後なのか汗で体が光っている。

『それにしても聞けば酷い出来のようね……あれだけ待たせてったの四つだけなんて……』

「ふん。こちらの苦勞も知らずにほざくな。あの石を探すのは発動してからでないと到底無理だ。サイズも小さければ力も無いガラクタだ。力さえ出なければただの石でしかない」

『……まあいいわ。明日にはフェイトの報告……その時にでも躰けてあげるわ……』

プレシアの薄ら笑いが聞こえた時、カリフの無表情が強張る。

「一つ言っておく」

『なに？』

「今のフェイトは疲れているのだ。辛いこそすれ奴に手を出そうものなら容赦はせんぞ」

『なんですって？』

電話の向こうのプレシアは意外そうに声を洩らした。

『貴方……今は私と契約しているはずよ……』

プレシアの地獄の底から聞こえるような声が電話から聞こえてくる。

だが、カリフはそんな声にも臆することなく続ける。

「オレと奴も互いに誓約を交わしている。そのためなら貴様の一人や二人消してくれる」

『私とも契約しているはずよ？ 約束をモットーとしているあなたが自らその約束を破るのかしら？』

意趣返しのもりで言った皮肉もカリフは一笑する。

「貴様とは“ジュエルシードを集める”と交わただけでお前の命の保証した覚えはない」

『……』

「それでも賤たいのなら、オレが貴様を二度とおイタができないように調教するだけだ」

『……分かったわ……貴方相手じゃあ賤けは諦めるしかないわね……』

「そんなに急がせたければリーダーでも造れ」

『できるならとづくにやっているわよ』

ともあれ双方とも目的には不可侵を守っている。余計な詮索は互いの時間の無駄でもあり、寿命を減らしかねない。

そんなこともあり、この話はすぐに終わった。

「ところで明日はお前に聞きたいことがある。フェイトの報告が終わり次第すぐにこっちの世界に來い」

『……なにか気になることが？』

「ああ……お前は魔法を使えそうにないからな。フェイトに送らせてやる。なにせこっちの世界でないと都合が悪いからな」

『……ええ、丁度私も聞きたいことがあるのよ』

聞きたいこと？…と聞き返しそうになるが、逆に都合がよさそうなのでそこは放っておいた。

「そうか……なら、明日にまた会おうか」

『ええ』

そう言って電話は切れ、カリフはしばらく闇の中で蛍のように動く車の、街路樹の光をしばらく望んでいたのだった。

そして、プレシアの時の庭園での報告の日が来た。

「それじゃあ準備はいい？」

「あいよ」

「当然だ」

いつもフェイトたちには内緒でプレシアと連絡を入れている屋上へと登っていた。今回違うのはカリフ、アルフ、フェイトの三人が集まっていることだ。

「でも、こういうのあの人は喜ぶのかねえ……」

「こういうのは気持ちだから」

フェイトが持っているのはケーキの箱。

アルフとしてはここまでプレシアに尽くすフェイトが眩しかった。

「それよりも速くしないか？」

ここで痺れを切らしたカリフはフェイトを急かす。

「あ、ごめん。じゃあ行くね？」

そう言ってフェイトが何か呟いたと思った時には既に光に包まれていた。

「ほら、着いたよ」

フェイトの声で周りの風景が変わっていることに気付いた。

マールブル状の風景に浮かぶ巨大な城は明らかに異質なものを感じさせた。

「相変わらず広すぎるな。オレがリフォームしてやろうか？」

「だ、大丈夫だと思うけど…」

「あはは……」

カリフのジョークに二人が苦笑いを浮かべながらプレシアの部屋にまでたどり着いた。

「じゃあ行って来るから」

フェイトは一人で行こうとするが、そこでカリフが申し出た。

「待て。オレも奴に用があるからオレも行く」

「え？ そうなの？」

意外そうにフェイトが目を真ん丸にする。

「ああ、今回の件は事情が変わった。その判断材料としてプレシアからの意見が欲しい」

カリフからの予想外な要望にフェイトは答えに困る。

「で、でも……母さんが許してくれるかどうか……」

「構わんオレが許す」

「大丈夫かなあ……」

あまりのカリフの自己正当化にフェイトも困り果てる。

だが、そんなフェイトとは対称的にアルフは思いがけない助けに内心で歓喜した。

自分がプレシアと相手をしてフェイトを護り切る自信は無い。

だけど、自分とフェイトを相手に勝利を飾ったカリフならフェイトを護ってくれる。そう確信できた。

（本当はアタシがやらなきゃならないことなんだけどね）

フェイトの使い魔という役目がアルフの悔しさを少しだけ掻き立てる。

それでも、やっぱりフェイトには傷付いて欲しくない。

「カリフ」

「？」

だからこそフェイトは素直に感謝できた。

「フェイトを護ってあげて……」

アルフの突然の願いにキョトンとはしたが、すぐに自信満々に親指を立てる。

「オレを誰だと思っている？」

そうだけ言うと、すぐに先に向かって行ったフェイトの後を追う。

「ありがとね……」

アルフは遠ざかるカリフの背中を見つめて独り口ずさんだ。

「ああ、帰ったのね……フェイト……」
「はい……」

フェイトが開けた先の台座にプレシアの姿があった。

感情の無い声で娘の名前を呼ぶ親とそんな母に畏れを見せる娘。

どう考えても普通じゃない。

親子とは思えない二人の間のやり取りは次第に空気を……

「よお、まだ生きてるな紫ばあ」

ぶっ壊した。それはもう完膚無きまでに……

突然の罵倒にフェイトはオドオドし、プレシアは額に青筋を浮かべた。

「貴方こそしぶとく生きてたのね」

「御託はいい。ハラ減った。なんか出せ」

「どこまで私を怒らせるのかしら？ 地獄か？ 地獄に墜ちたいのね？」

カリフの嫌味にプレシアはデバイスを構えて臨戦態勢に入る。それに応えるように指でチョイチョイと誘っている。

本気で殺し合いそうな雰囲気フェイトは冷や汗をかきながら仲裁に入る。

「あ、あの……！ それで母さんにケーキ買ってきたんですが……」

「……いないわ」

「よし、じゃあオレが貰おう」

母のために買ったケーキを受け取ってもらえなかったことに落胆はしたが、二人の戦いを止めた安堵感が大きかった。

そして、カリフを含めた報告会が始まった。

とは言っても前以て結果を知らされたプレシアは特にアクションを起こすこともなく、「そう……」の一言で済んだ。

また折檻がくるかと思っていたフェイトは予想よりもあっけない
終わり方に啞然とした。それと同時に心の中でホッと安堵したのも
事実だった。

その原因が後ろでショートケーキをがつっている少年とは知ら
ずに。

「……」

「……」

そこから何を話すでもなく、親子の間で重苦しい沈黙が漂った。

「ふふ……じゃあもう行くか？」

そんな空気を木っ端みじんに砕くのも口周りのクリームを手で拭
い取るカリフである。

「……行くってどこへ？」

プレシアは空気を全く気にしないカリフにもう何も言うまいと呆
れて聞き返した。

もちろんその答えは……

「地球」

冗談であってほしかったが、容易に思い付いた場所だった。

「んじゃあよろしく。フェイト」

「え?…え?」

話が一段階も二段階も進んで着いていけないフェイトの肩をポンと叩いてカリフは全てを丸投げにした。

遠見市に夜を巡る四つの影があった。

そして、その四つの影はとある店の中へ入って行った。

「いらっしやいませー! す〇みな太郎海鳴店へようこそー!」

「四人」

「かしこまりましたー!」

足を踏み入れれば従業員の笑顔の接待が間もなくやって来た。

お客様に即座に対応できる良い店だ。

「「「……」」」

カリフが何かに感心する中、プレシア、フェイト、アルフは呆然とした。

自分たちは何をしているのだろう、と。

「あの……一つ聞いていいかしら？」

「なんだ？」

「何ここ？」

「すた○な太郎」

「なんで？」

「バイキング」

「OK、質問を変えるわね？ フェイトたちはいいいけど、なんで私まで？」

「海鳴店限定イベント。四人以上のご来店で食べ放題時間がさらにもう一時間プラス」

「よっしゃ。覚悟しやがれ」

まさか、こんなどうでもいいことに自分をも巻き込んだのか？
そう思って聞いた。

答えも返ってきた。

マジでいい加減にしろよ？

わざわざそんなことで呼び出したのか？

「まあ、待て」

今にもブチ切れそうなプレシアに待ったをかけたカリフは手を突き出して一言告げた。

「まずは腹ごしらえだ!!」

「それで？　本当になんの用よ？」

肉を焼く時の香ばしい匂いで満たされている空間でプレシアは片肘をついていた。

目の前には皿に肉のタワーを作ってホクホク顔のカリフが座っている。

フェイトとアルフは少しの間だけ食べ物を集めてほしいと言って外してもらってる。

「ちょっと確認したいことがあってな」

「確認？」

「……そうだな…食うのはフェイトたちが持って来た物を待っても遅くはないな……」

少し考えてからプレシアを手招きしてトイレを親指でクイッと指す。

その意味を理解したプレシアはカリフと共にトイレへと入って行った。

「それで？　なにを見せてくれるのかしら？」

プレシアはまた馬鹿なことかと思ってため息をつきながら聞いた。

完全に諦めている。

「ここに呼んだのは他でもない。ジュエルシードのことだ」

「ああ、そんなこと言ってたわね」

プレシアも思い出したように言うと、カリフは全てを見せることにした。

「オレは昨日暴走したジュエルシードを掴んで黙らせた」

「だま……ていうか昨日の次元振を抑えたというの？　魔力も無しに？」

どこまで常識はずれなのか……そう思った直後に更にその考えを裏付ける物を見せてきた。

「そしたらこいつが生えてきた」

「？……それは？！」

カリフは服で隠していた尻尾をヒュルンとプレシアに見せ付けた。

プレシアはもちろん驚愕した。普通の人間には有り得ないものだったから。

「貴方……使い魔だったの？」

「いや、これはサイヤ人の個性だ」

素っ気なく答えながら尻尾を自在に操りながら本題に入る。

「それで、是非お前の意見が聞きたくなったのだ」

「それは多分だけど、貴方の願いに対するジュエルシードの感応ね」
「願い……」

ある程度の話聞いてプレシアはそう確証していた。

ジュエルシードは元を正せば願望を叶える宝石。

だが、ジュエルシード自体の莫大な魔力が対象の願いを必要以上に叶え、逆に破滅をもたらす。

ジュエルシードがロストロギアと呼称される所以である。

だが、カリフはそのパワーを一身に受けたのだ。

そして、カリフが勝った。

つまりそういうことである。

「貴方の願いは強くなること、なら話は簡単よ。その尻尾が貴方の成長のキーとなる……ほぼ推測だけどね……」

「なるほど……つまり……あの苦痛を越えればオレは……」

ふと一度だけなりかけた大猿化を思い出した。

あの時の本能の奔流、殺意の嵐、自分が自分でなくなる感覚は今でも忘れない。

だけど、逆に言えばあの苦しみの果てに目指す道がある。

そう直感した。

「大分参考になった。礼を言う」

「え、ええ……」

普段の憎たらしい子供が真摯に礼を言ってきたのに面を喰らったようだ。

そんなプレシアに関わらずにカリフはプレシアに問う。

「それで？ お前は何を聞きたいのだ？」

「え？」

急な返しにプレシアは面を喰らった。

「忘れたのか？ お前も聞きたいことがあるからここに来たんだろう」

ここまで言って思い出した様子のプレシアに少し呆れながらも促す。

そして、プレシアはゆっくりとした口調で本題に入る。

「以前に言ったわよね？ 同じ物はたとえどれだけ似せようが本物にはなりえないと……」

「ああ……言ったなあ？」

「なんで疑問系なのよ……ともかく、私も貴方の意見が聞きたいのよ」

プレシアの呆れも無視してカリフは無言で続きを促す。

「例えばよ？ もし自分の子供を亡くした母親がその子供を転生の意味でクローンを造った」

プレシアの例え話にカリフは若干眉に皺を作る。

そんなカリフに気付かずにプレシアは続ける。

「だけど、その子供は本物とは似ても似つかない失敗作だった……」
「……」

「こんな時、母親はどうしたらいいのかしら？」

同じ物は二度と戻ってこない。

それなら今まで、そして、これからやろうとしていることは無駄なのだろうか……

それなら自分はどうすればいいのか……

その答えを目の前の少年に聞いてみたかった。

そして今まで話を聞いていたカリフはゆっくりと答えた。

「知るか」

返ってきたのは本心からの答えであり、拒絶だった。

「……え？」

まさかの一言にプレシアは硬直した。

「子供が似てなかったからなんだ？ その後の人生などオレの知ったことじゃない。育てなければ育てればいい。捨てるなら捨てればいい」

結局のところ、答えは自分で見つけなければならない。

その後の人生は自分で決めなければならないのだから。

「ただ、自堕落に生きればいいんじゃない。オレなら終わったことをネチネチ考えるより、どう生きるかを考える」

「……」

プレシアはカリフの言いたいことがなんであるかを悟った。

『過去よりも未来』

まさにこの一言に尽きた。

「話は終わりか？」

「え、ええ……」

少し物思いに耽ったプレシアはカリフの声に気付き、相槌をうつ。

その答えを待っていたと言わんばかりに頷き、カリフは尻尾を再び隠してトイレから出ようとした時だった。

カリフは思い出したようにプレシアに言った。

「あ、そういえばオレの母親が言ってたな」

「？」

「兄が大人しければ弟は騒がしいって……世の中バランス良くできてるってな」

最後にそう言ってカリフは再び戻ってきたフェイトたちを交えて肉を焼いて食いまくった。

プレシアはそんなカリフを呆然と見て呟いた。

「バランス……ね……」

いや、その無意識の言葉は必然的に心から洩れたものだった。

苦笑いを浮かべるフェイトを見つめながら……

「ふう……久しぶりに食ったな」

「うう……私はお腹一杯だよ……」

「今回はアタシも満足だよ！ フェイトったらあまり食べないから最近心配だったんだから！」

食べ放題の店から出てきた面子は一部満足そうに腹を抑えていた。

カリフも今回は満足したようだった。

自分は満腹すぎて苦しいけど、アルフとカリフの笑顔を見て満足する。

だけど一つ気になることは……

「……」

焼肉屋からずっと黙り込んでいるプレシアに怖ず怖ずと近寄って話しかけた。

「あ、かあ……さん……」

「……」

聞こえてないのか、全く反応がない。

意を決してさっきよりも大きい声で呼んでみる。

「か、母さん」

「ん？ あ、なんの用？」

急に呼ばれて少しうろたえながらも素っ気ない言葉で対応するプレシアに少し驚いた。

が、いつものように怖い雰囲気が無いのに安心もした。

「えっと……楽しかったですか？」

差し障りのないような話をしようとするが、プレシアは額に青筋を浮かべてカリフを睨む。

「楽しいなんて良く言うわ……あのおバカが勢い余ってドリンクと間違えてビール瓶を5本飲んだのを頭下げたのよ……なんか疲れたわ……」

「……」

完全に話題に失敗したと思ったフェイトは何も言えなくなった。

そのまま無言で二人は並んで歩いていただけだったが……

「おい！」

「「！！」」

カリフの大声に二人は驚きながらもそつちを見ると……

「次はミ○ド食いに行くぞ！ 食後のデザートにはうってつけだからな！」

「アンタ……どんだけ食うんだい……」

「お前もだ」

「うええ！？ さっきのところで食いまくって……」

「……あはは……」

「……はぁ」

二人で騒ぐ姿を見たフェイトは苦笑し、プレシアはもう本当に諦めた。

「全く……少しはフェイトみたいに大人しくできないのかしら？」

思わずに出した一言にプレシアは自分が言ったことに気付いた。

（今……なんであんなことを…）

自分でも不思議だった。

自分はフェイトを憎んでいる。

それは今でも変わらないはずだった。

（なのに……）

その一瞬だけ思った気持ちに戸惑うばかり。

しかも、この時のプレシアは自分でも他人から見ても信じられないことをしていた。

「あ………」

「！！」

いつの間にかフェイトの頭に手を置いていた。

それも、ただ置いただけじゃなく、優しく包むように……

まるで、愛しい物を愛でるように…

「か、母さん？」

戸惑いながらも上目づかいで見上げてくるフェイトにプレシアは慌てて手を離してフェイトから離れるように無言でカリフたちを追い掛けた。

半ば置き去りみたいいき取り残されたフェイトは不思議と胸が温かった。

（一緒に食事なんて……もうできないと思ってた）

覚えている記憶では、こうして親子で食事なんて心のどこかで無理だと思ってた。

でも、今日は少し疲れたけど久しぶりに特別な時間だった。

それだけでも夢のような時間だったのに、もう一つだけ彼女にとっての事件が起こった。

頭を撫でてくれた……

いきなりで反応できなかったが、今になって分かった。

母さんが私を撫でてくれた

フェイトの心はもうそのことに満たされたのだった。

（ありがとう……母さん……）

心の中で感謝し、三人の人影を追い掛ける。

自分の勘違いでも構わない。

だけど、また私は母さんに笑顔を

浮かべてほしいんだ

フェイトが新たに決心したこの日の夜空には綺麗な形の満月が浮かんでいた。

淡く光る月光は四つの影を優しく照らし続けたのだった。

まるで、彼らだけを包み込むように……

余談だが、翌日にカリフたちが食べた焼肉屋はしばらくの間は休業したのは割愛しよう。

自称・時空を管理する番人（前書き）

こちらにも返信や誤字脱字も可能になったのでよろしくお願いします
！！

自称・時空を管理する番人

プレシアとの外食から一夜明けた海鳴市

辺りはうっすらと茜色に染められていた。

空は朱に彩られ、光を反射するビル、照らされる公園

どこにでもある景色が海鳴にもあった。

ただ一つ、他とは異質な点があるとしたら……

——グオオオオ！！

公園の海のほとりの木が突然に『唸り』……

「おーおー。今回は随分とイキがいいな」

「うん。ジュエルシードの感応が激しい証拠だ」

「まあ、フェイトの敵じゃないね」

空からその異形を見下ろす二人の年端もいかない少年と少女、それに一匹の狼がいた。

木は完全に己の道を踏み外し、生物の体を成さなくなった時に新たな影が二つ。

「ジュエルシード！！」

「気をつけてなのは！ 今回の手強いよ！！」

なのはとユーノの参戦にフェイトは予想できていたのか、なのはたちを一瞥するだけだった。

そして視線を木に向け、どうやって倒そうかとプランを練っていた時だった。

「あれ、今回はオレに譲ってくれ」

「「え!？」」

木を指差してニコニコと笑うカリフにフェイトとアルフは度肝を抜かされた。

「あれに一人でなんて危ないよ!」

「そうだよ!　ここは三人(?)で攻めたほうがいいって!!」

「どうしたんだろ?」

「さあ……」

二人がなにか騒いだことに遠目のなのはたちも気付いたようだが、カリフはそれでも頑なに譲らない。

寧ろ鼻で笑う。

「たかが虫に毛が生えたような奴だ。問題ない」

「で、でも…」

「それにお前はやり過ぎだ」

「な、なにが?」

思わぬカリフの反撃にフェイトはたじろぐ。

「フェイト……随分とジュエルシードを見つけたんのが早過ぎやしね

えか？」

「……」

「やっぱな……お前のことだから寝てねえ上にメシも食ってねえんだろ？」

フェイトの沈黙にカリフは溜息を吐かずにはいらなかった。

ただでさえ小さい体なのに、食わず休まずに疲れだけを溜めているのは目の下に薄い隈を作っていた様子で明らかだった。

そんな状態で闘えば万が一ということもある。

「だから今回は譲れ。これ以上やると痛い目見るぞ？」

「そ、そうだよフェイト……今回はカリフの言葉に甘えよう？　ね？」

内心では不安もあるけど、やっぱり自分の主が心配なほうが強かった。

カリフとアルフの説得にフェイトもついに折れた。

「……分かったよ……でも、無理だけは……」

「お前に言われるのだけは心外だ」

「うう……」

「気にしないことだよフェイト。こうやって悪ぶっちゃあいるけど本当はフェイトがしんぼぐはあ……！」

「アルフ!？」

「おっと。手が勝手にアルフの顔面に吸い込まれた所でそろそろ行くぞ」

そう言って顔を押さえてのたうち回るアルフと本気で心配するフ
ェイトを置いて一人地に降り立つ。

——グオオオオ！！

「五月蠅い奴め、すぐに遊んでやるから待ってろ」

そう呟きながら独特の構えをとった時だった。

「あの……カリフくん？」

「ん？」

背後からの声に気づき、振り向くと、そこには少し遠慮がちな
のがいた。

「なんだ？ 高町なのは」

「あう……そんなに睨まないで……」

「生れつきだ」

「ご、ごめん……」

戦い直前に気分が高まっていることもあってか、カリフの鋭くな
った眼光になのはあとずさる。

そんな少女にカリフは溜息を吐いて警告する。

「もう分かったから速く立ち去れ。こいつはオレ一人で片付ける」

「え……ええ！？」

さも当たり前のように告げるカリフになのはは慌て警告する。

「駄目だよ！ カリフくんは魔力が無い普通の男の子なんだよ！」

「ふん。それよりも上に逃げな」
「え? ……!!」

カリフの警告と共に影ができ、再び木に注意を向けると、そこには自分たちに根をたたき付けようと振り上げている所だった。

「レイジ……」

相棒に呼びかけようとした時、一つの根がなのはの横から迫ってきていた。

「!?!」

「なのは!!」

ユーノの声と共になのはは気付くが、もう遅かった。

なのはの眼前に命を絶つ鈍器が迫り、悲鳴すら上げることすら許さずに残り一ミリと迫っていた。

「おっと」

その時だった。

カリフが巨大な木の根の直撃を受けた。

「きゃあ!!」

「カリフ!!」

けたたましい衝撃音になのはは悲鳴を上げ、フェイトは悲痛に力

リフを呼んだ。

アルフもユーノもその光景に衝撃を受けていた。

――グググ……

木もほくそ笑むかのように唸っている。

そして……

「そう。そうではなくてはなあ……」

「」「なっ!!」「」

その場の全員の予想を裏切った。

そこには左手を突き出して微動だにしないカリフが楽しそうに笑っていた。

人差し指一本で根を支えて……

「なにぼっとしてやがる」

「ふえ!?!」

「さっさと離れな」

「う、うん!」

顎を上空に振る仕草でなのははカリフの意図を理解し、すぐに上空へと飛ぶ。

その途中でなのはは止まり、カリフに向き直って言った。

「あの！ 助けてくれてありがとう！」

そうとだけ笑顔で言うともた嬉しそうに上空へと帰っていく。

そんなのはを見てカリフは頬をポリポリと掻いてぼやく。

「そんなつもりじゃなかったんだがなあ……」

なのはを助けた理由は二つあった。

一つは単純に邪魔だったから。

もう一つは命を懸ける覚悟もない素人を巻き込んで死なせるのは自分の理念に反するからである。

本当にそれだけ。他に理由もない。

戦うのに思いやりや優しさなど糞の役にも立ちやしない。

まあ、相手がどう捉えようがかまやしない……むしろ今重要なのは……

「オレが少しでも楽しければそれでいい……」

——グオオオオ！！

木はこれまでとは比べ物にならないほどの数の根を地面から出して一斉にカリフに襲い掛かる。

最大の敵はカリフと認定し、夕日を遮るほどの数と驚異的な長さを誇る根を見せ付けた。

孔雀の羽のように見せ付けて威嚇するが、カリフは腕を組んで鼻で笑うだけ。

むしろ、少しだけだが笑みを浮かべた。

「ふん。ナリだけはマシなようだが……」

その瞬間、カリフは……

「「「!?!?!」」」」

ピシュンとその場から消え……

「それがなんだ？」

――グルル!?

突如後ろから聞こえてきた声に木が振り向いた瞬間、木は鈍い打撃音と共に肢体を『く』の字に曲げて吹き飛んだ。

巨体のあった場所ではカリフがアッパーカットを繰り出した姿があった。

「……ひゃは！」

拳から伝わる快感にカリフは恍惚の笑みを浮かべ、白いオーラを纏って殴り飛ばされた木の後方へ弧を描いて先回りし……

「うえあ!!」

木に踵落としをくらわせた。

メキメキと樹皮が碎ける音と共に地面へと急降下していく。

「ぎゃは！」

急降下して落下する木の樹皮に五指を食い込ませ……

「死にやがれえええっ！！！」

急降下している落下スピードに加えて更なるスピードを課した状態で木を投げ付ける。

凄まじいスピードで投げられた木は摩擦熱で枝が燃え始める。

——グギャアアアア——

悲鳴を上げる木は全身を燃やし、天然のミサイルと化して地面に突っ込み、アスファルトを破壊した。

それどころかアスファルトにクレーターを作り、爆弾を爆破させたような粉塵を放射させて辺りを覆った。

「「「……………」」」」

傍目で見ていたフェイトたちはあまりのショッキングさに呆けた。

今まで生きてきて、これほどまでに粗暴で乱暴、凶悪にして圧倒的な戦法は見たことがない。

なのはとユーノは初めて見るカリフの実力に思考が停止し、フェイトとアルフはカリフの潜在的パワーに圧倒されていた。

「ふゝ……少しは気が晴れたぜ」

晴れやかに手に着いた埃を払うカリフは少し満足したようだ。

（あっさりと片づけてしまった……でもまあ、こんなもんか……）

物足りないとは感じたが、久しぶりに殴ることができたから良しとしよう……

そう思いながら未だ固まっているフェイトを促した。

「封印。早く」

「え？……あ、封印だね……」

我に返ったフェイトに吊られてなのはも我に返り、二人はそれぞれのデバイスから金と桃色の魔力を溜め、閃光を放った。

「「ジュエルシード、封印！」」

凄まじき魔力が木に集中し、やがてはジュエルシードだけが宙に浮いていた。

ジュエルシードを挟むように向かい合うフェイトとなのは

「この前みたいに暴走しちゃうと危ないから……」

「うん……でも、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌形状に変えて構える。

なのも避けられぬ戦いを感じ取り、レイジングハートを握りしめる。

「私が勝ったら甘ったれじゃないって認めて、ジュエルシードを集める理由を教えて」

なのはの提案にフェイトも沈黙の了解で答える。

沈黙だけが支配する状況の中で、アルフもユーノも固唾を飲む。

もちろん、カリフも例外でなく、静かに二人を見据える。

今回は久しぶりに気分もいいから二人の決闘を堪能しよう。

（まだ言うことは甘ったれだが……中々サマになってきたじゃないか……）

なにより、あの二人はもはや鋼鉄の絆で繋がれた宿敵となっている。

その繋がりはとても危険であり、しかし特別でもあった。

元は戦の『い』の字も知らない一般人がよくここまで昇華した、と内心でなのはに敬意を評していた。

故に、これはもはや喧嘩でもなければジュエルシードの賭け試合でもない。

聖戦

何人たりともこの戦に横槍は入れさせない。

カリフは自然にこの戦いに惹かれ始めていた。

強さなど関係ない。

信念と信念の戦いである。

「……」

「……」

やがて二人はデバイスに一層力を籠め、互いにぶつかり合う。

はずだった。

「ストップだ！」

突如、その声と共に二人のデバイスは防がれた。

そして、そこには黒のバリアジャケットに身を包んだ少年がいた。

「……あ？」

そして、カリフのさっきまでの高揚感は一気に萎えた。

若干苛立ったカリフに気付かず、少年は続ける。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ！　ここでの戦闘は危険だ！　武装を解除するんだ！」

「管理局！？」

アルフが驚愕するが、どうでもいい。

重要なのは二人の聖戦をも止めた。

「……はぁ？」

その瞬間、カリフの額に血管が浮かぶ。

「うわ！」

「わぁ！」

カリフの周りの木々に輝が入り、周囲の小石が破裂したのにアルフとユーノは驚愕し、跳びはねてしまった。

それに気付かないクロノと名乗る少年は続ける。

「これより、ジュエルシードは時空管理局が管理する！」

ジュエルシードをも掠め取るような発言。

この時、カリフの中の何かがブチキレた。

「うわぁ！」

「え！？　なになに！？」

カリフの周辺のアスファルトだけが急に砕け、爆ぜたのにアルフとユーノはまた驚愕する。

だが、ここまできると、アルフはカリフの仕業だと思いながらゆっくりと彼の顔を覗き込む。

「あのく……カリ……」

ここから先の声が出なかった。

否、出せなかった。

「あ……あ……」

アルフは持ち前の野性の勘と本能に警鐘をかけていた。

後にアルフは言うだろう……

「ねえアルフちゃん……あれ……死刑でいいよねえ？」

あんな顔……人間にはできっこない……

あれは紛れも無い、本物の悪魔だった……と。

自称・時空を管理する番人（後書き）

次回、クロノくん夕陽に死す！？

愛を叫んだケモノ

クロノ・ハラオウンと名乗る少年によって戦いは止まり、一方では氷点下さえも生ぬるいほどに凍りついた雰囲気になっていた。

「まずは武装を解除し、地上に降りるんだ」

フェイトとなのはに忠告した後、カリフやユーノたちにも黒い杖のデバイス向けて警告した。

「君たちも下手なマネはするなよ!!」

完全に場を掌握したのだと思っているのか、上からの発言にカリフは大層驚いた表情を隠せなかった。

「上から目線……だど?」

「不味いよ……フェイトだけじゃなくてあたしも危ない……」

色んな意味でやばくなってきたカリフに冷や汗をかきながら自分への二次災害を警戒してか、すぐに舌打ちしながら魔力弾を練り上げる。

「今回のジュエルシードは諦めるしかなさそうだね……逃げるよフェイト!!」

「!!」

アルフはクロノに魔力弾を飛ばし、フェイトをサポートする。

だが、ここでフェイトはアルフの元ではなく、ガラ空きのジュエ

ルシードの元へと向かった。

「フェイト!？」

主の予想外の動きにアルフは反応に遅れ、カリフはクロノが構えて魔力を練っているのを目にした。

(フェイトの動きを読んでいたか……だが、てめえのスピードでフェイトに当たるわけがねえんだよ)

フェイトのスピードはカリフも認めてはいたので、今回も避けられるだろうと仮定していた。

だが、ここでまたしても事態が変わった。

「う……あ……」

途中でフェイトはよろめき、遂には地面に転倒してしまった。

「!？」

「フェイト!？」

「フェイトちゃん!!」

魔力弾は避けたものの、地面に打ち付けた体は呼吸音と共に苦しそうに動くだけ。

腰を下ろしていたカリフも思わず立ち上がってフェイトの元へ駆けつけた。

「フェイト!!」

アルフも近付いてきた所でフェイトの顔を見ると、顔が赤くなり、汗でびっしょりだった。

額に手を当ててカリフは確信した。

（熱か……！）

舌打ちをしながらフェイトに怒鳴った。

「……大して体が強くねえお前が飲まず食わず、休まずにいればこうなることくらい分かってただろう！！ このバカが！！」

カリフの叱責にフェイトは虚ろな目でカリフを見上げて呟いた。

「……ごめん……ごめんなさい……」

返ってきたのはフェイトからの謝罪

自分の不注意でアルフとカリフに迷惑をかけたのだと思い、そう言わずにはいられなかった。

この言葉を聞き、フェイトの苦しそうな顔を見てカリフは内心で悪態をついた。

（くそ……！ 地球人ってのは、なんて脆い生き物だ……！！）

たった数日の無理だけでここまで壊れるとは……

「ど、どうしよう……フェイトが……フェイトが……」

カリフとは裏腹にフェイトの容体を重く受け止めたアルフは狼狽して視線をカリフに縫った。

そんなことをしている時にも関わらずに後ろでクロノが再び弾を練り上げていた。

もちろん、それを見逃す程カリフは甘くなかった。

「アルフ、お前等はフェイトを連れて帰れ」

「え？」

「そしてフェイトをベッドに縛り付けてでも休ませろ……飯も口にねじ込ませてでも食わせろ！！」

「スナイプショット」

クロノの放った魔力弾がカリフの激昂と共に放たれた。

「止めて！！」

なのはの願いなどに耳も貸さずに複数の魔力弾はカリフに強襲した。

「るせえな……」

向かってくる弾幕に背を向けていたカリフは振り向きざまに腕を振り払うと、強烈な突風が起こり、魔力弾を全てかき消す。

「ぐっ！！」

「きゃあ！！」

「うぐぐ……」

そして、突風の猛威は弾幕の消去だけでは飽き足らずクロノ、なのはをも吹き飛ばさんとし、二人も踏ん張る。

ユーノに至ってはなのはの服にしがみついているのだから滑稽なところの上ない。

細い木々は折れ、大木はしなる。海は小規模の波がたつほどであった。

「こ、これは……」

突如起こった超常現象にクロノは舞い上がる砂埃を腕で防いでいると、声が聞こえた。

「なあ……ちょっと付き合えよ……」

「!!」

声に反応して腕をどけてみると、目の前に一人の少年が大胆不敵に両手にポケットに入れて自分を見据えていた。

この突風の中を平然と仁王立ちし……

目にも見てとれる狂暴な光を瞳に宿して……

「まあ……答えは聞いてねえけど……なあ!!」

「ぐぼ!!」

そして、おもむろにカリフはクロノの懷にパンチを一発入れてきた。

威圧に吞まれていたことと不意を突かれたことによって完全に攻撃を受け、数メートル飛ばされ、木に背中を撃ちつけてへばりつく形になった。

だが、バリアジャケットの恩恵で見た目は派手だがダメージと衝撃はそれほどでもない。

「く……どうやら君を連行せねばならないようだ……」

「ふん……それくらい威勢がなくては困る……ああそれと……」

クロノの警告を鼻で笑い飛ばし、カリフは指を二本立てて言った。

「二十発だ」

「なにを……」

カリフの不敵な笑みとは裏腹に意味不明な台詞にクロノが食ってかかろうとした時だった。

「ぐふう!!」

「「「!!」」」

ドゴン!……と突然クロノの腹部に激しい衝撃が襲いかかり、背中の木をなぎ倒して再び吹き飛んだ。

なのはたちはその現象に驚きを隠せなかった。

そして、これだけでは終わらない。

そこから鈍く、重い衝撃が連鎖的にクロノの腹部を貫き、遂には

木々をなぎ倒すだけでなく、地面を抉りながらクロノをフェイトたちから引き剥がしていった。

「よし、アルフ。さっさと行け」

「え、でも、カリフはどうするのさ!？」

「お前等に心配される筋合いはない。これから少し遊ぶだけだ」

クック……とクロノの吹き飛び、土埃がたち始めた地点を見据えて笑うカリフにアルフは背筋が寒くなった。

だが、それは自分たちを助ける意図だと理解し、アルフは感謝した。

「ありがとう……絶対に戻ってきなよ？」

「勘違いするな。オレは心底ムカついてるんだ。お前等がここにいと邪魔なだけだ」

冷たいとも言える言葉だが、それに文句を言う余裕がアルフには無い。すぐにフェイトを抱きかかえて空に飛翔、時空を使って行方を眩ませた。

「高町なのは。お前もすぐに帰れ」

「え?……でも……」

「お前はまだ一般人だ。お前が巻き込まれたとあっちゃあオレのルールに反する。もう一度言う。帰れ」

なのはに帰れと言うカリフだが、すぐに前方の気の動きに気付いて視線を戻すとそこには息使いが荒くなったクロノが腹を抑えて自分を睨んでいた。

「貴様……なにをした……」

「ほう……」

端正な顔も苦痛で歪ませながらも誇りを捨てていない意志にカリフは少し見直しながらも無邪気な笑みを浮かべて答えた。

「なにを言うかと思えば……ただの挨拶だ」

「挨拶……だと？」

「ああ、咄嗟に考えた技でな、試しにお前にそれなりに速い十発をかましたんだが中々面白かっただろ？」

「十発？ ハツタリもいい加減にするんだな」

ボロボロになりながらも皮肉るクロノは時間を稼ごうとするが、カリフにはその姿が負け犬の典型的な姿にしか見えず、思わず吹いてしまった。

「まあいいや、どの道これで終わって貰っては困る。でないと捌りがいないからな」

「ふん……それなら賭けてみるか？」

「あ？」

「お前と僕……どっちが先に倒れるかを！」

そう言っただけクロノがデバイスに更なる魔力を練り上げて放った。

「ブレイズキャノン」

デバイスの音声と共に先程の弾幕よりも巨大で協力的な砲撃をカリフに向ける。

量よりも質できたクロノに対してカリフは動かない。

「ファイアー!!」

そして、クロノの言葉と共に魔力弾はカリフへと発射され、直撃した。

「カリフくん!!」

「そんな……これじゃあ彼は……」

爆発の余波に耐えながらもなのはとユーノはカリフの身を案じる。

そして、クロノもこの一撃でほとんどの魔力を消費したのか膝から倒れた。

「油断するからそうなる……ぐ……!!」

腹部にズキズキと痛みが走るのを感じて顔が苦痛に歪む。

『クロノ!! 大丈夫!?!』

「母さ……艦長……はい……目標は沈黙させ……うぐ!」

クロノの近くで巨大なスクリーンが現れ、そこには緑髪の女性がクロノを案じる。

「すみません……もう一人の参考人と使い魔を……」

『構わないわ。その女の子たちからでも調書はとれるから』

「それでは彼女をアースラに招き、先程の少年を連行します」

『そうね。取り調べは拘束したままで行うから油断しては……』

淡々と話が進んでいたとき、何の前触れもなくクロノの背筋が凍

った。

なぜだか分からないが、自分の戦士としての勘が警告してきた。

“逃げろ”

「なんなんだあ？ さっきのはあ？」

「「！！！」」

『クロノ！ 後ろ！！』

クロノは艦長と呼ばれる者の声に反応し、後ろを振り向くとその直後に顔面を掴まれる。

「ぐう……あああああ……！！」

顔面に入る力に悶え、クロノは宙に浮かされる。

そして、その掴んでいる人物は言うまでも無くカリフだった。

「はっはっは……さっきのは中々齒ごたえがあったぞ……だが……」

——オレには届かなかったなあ……ええ？

「！！！」

歓喜でありながらどこか歪んだ声を聞いたクロノは恐怖し、もがき、なけなしの魔力で造った弾幕をぶつけるが、カリフには全く効いた様子がない。

「お前の魔力を見せてもらった礼だ……オレも見せてやるよお……」
「ぐううう!!」

カリフは手に力を更に込め、悲鳴を上げるクロノを前に口を三日月状に形作り、齒を見せて悦に浸った。

「オレの……暴力って奴をよお!!」

カリフは海の方へと体を向けたとき、流石にまずいと思ったユ一ノは魔法陣を展開した。

「ストラグルバインド!!」

緑のバインドが魔法陣が幾重に出現し、カリフの手足を拘束する。

「もう止めるんだ!!　これ以上はただの暴力だ!!」

ユ一ノの必死の叫びが公園に響き渡る。

そして、その言葉を聞いたカリフは……

「だから?　暴力だからやるんだろ?」
「「!!」」

何を当たり前な……と言いたげな表情になのはたちは戦慄した。

この少年はなのはたちと違う次元で生きている……そう思わせるほどだった。

ユーノの質問に興味を失ったカリフはユーノを無視し、再び悦に浸り、武空術でクロノごと浮かぶ。

『止めて!!』

艦長が悲痛に叫ぶが、それすらも無視してクロノの頭を振りかぶって一緒に海へと急降下する。

クロノは抗えずに力無く体を揺らすだけである。

そして、二人は海へと突っ込み、巨大な水柱と津波を巻き起こす。

「なのは!!　すぐに上へ!」

「うん!」

なのはが飛び立つと、間一髪で陸へと侵入してきた津波を避けた。

「……ごぼっ!!」

そして、水中のクロノは強烈な水圧を受けた背中の痛みに悶えながら、カリフの指と指の間から見てしまった。

「……!!」

拳を振りかぶるカリフを……

楽しそうに、本当に愉しそうに笑いながら瞳に純粋な暗黒を秘め

た瞳を……

その光景の直後、痛みすら感じないくらいにアツサリと意識が途絶えた。

鈍い音と共に水面が殴った時の勢いで波紋を作り、やがては消えていく。

しばらくして、カリフは力無く項垂れるクロノの首筋を掴んだままゆっくりと地上へと姿を現した。

その光景をスクリーンの女性も、なのはも、ユーノも歯を小刻みにカチカチと鳴らしながら脳に刻み込んだ。

そして、理解した……

今、胸に抱いているこの重く冷たい感覚。

逃げたくても体の芯から掴んで離さない負の重り。

この時、初めてその場の人間は理解した。

これが……“恐怖”だと……

「ふ……はーっはっはっはっは……!!」

半壊となった公園の中心でケモノは愛を叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0277w/>

生まれ堕ちるは悪魔の子

2011年11月10日11時08分発行